



第29号200円

シネマ気球©

編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県流山市西深井 339-2
TEL 04 (7153) 1533
FAX 04 (7156) 7122

レスラー

「あしたのジョー」が脳裏に

プロレスラー三沢光晴がリングで死んだ。この報を聞き急いで映画館へ行った。ミッキー・ローク主演の「レスラー」を観るために。

映画のオープニングは主人公ランディの過去の輝かしい戦績を伝える雑誌の表紙や新聞記事の数々に熱狂するアナウンサーの声、トップロープから繰り出す必殺技の中継がかぶる……20年後、主人公は中年になり地方のスーパーでバイトしながら、家賃支払いにも

苦しみ、現役を続けていた。画面は、ランディの背中を不安定な手持ちカメラの映像で追う。それが臨場感を伝える。

対戦相手と会場控え室で、試合の流れを打ち合わせるランディ。いかにして観客を盛り上げるか、彼らはプロだ。

相手の技を逃げることなく全身で受けとめ、流血も辞さない。目を背ける映像からは、試合会場の観客を興奮させる彼らのプロ意識が伝わる。理屈じゃない。自ら鍛えた肉体を酷使し、極限まで痛めつける生きざまに圧倒された。リング上こそ彼らの輝く場所。

試合を終え、リングを降りたランディは不器用な生き方しかできない男。

ストリップ劇場の馴染みの踊り子との付き合いにしてもバイトに

筋肉増強剤、日焼けサロン、金髪の手入れにトレーニングで自らを磨く。しかし、試合後、彼は心臓発作で倒れ、入院。医師からは「過度な運動はできない」と宣告され、引退を決心する。

リング生活の間は疎遠だった娘との交流やストリップとの関係の居場所をつかみそうになるが、不器用な彼は唐突なストリップへの告白を拒絶され、娘との約束も失念し娘を悲しませた。彼は自暴自棄になり職場も捨てる。

彼の輝く場所はリング。彼はプロモーターに電話し20年前のライバルとの再戦を受ける。

大歓声で熱狂する観客、宿敵との死闘、ライバルはランディの異常に気づくが、リングに仰向けに倒された。ランディは必殺技をかけるためトップロープに上り観客を興奮の絶頂に盛り上げ、ダイビングする……。

この映画のラストシーンで、激闘の末、燃え尽き満ちた表情の「あしたのジョー」が脳裏をかすめた。数々の映画賞受賞の「レスラー」。

忘れられない作品がまた一つ増えた。

(絵と文・山下雄平)

クリント・イーストウッドの『グラン・トリノ』

若者の未来に
捧げた崇高な死

今市文明

私にはいま小学1年生を筆頭に男の子3人の孫たちがいる。彼らのあどけない仕草や日々成長していく様子を見ていると、どうか彼らの未来が明るいものであるようにと願わずにはいられない。そして私は厄介な持病を抱えた身でもある。日本人の平均寿命まで生きるのはまず無理だろうと覚悟している。そんな中、もし今、愛する孫たちの未来に決定的な危機が訪れようとしたら、私は自分の命を賭しても守ってやりたい。こんな思いが最近時々よぎることがある。クリント・イーストウッドの監督・主演作『グラン・トリノ』は、私にこのような感慨を想起させる作品であった。

イーストウッド扮する78歳のウォルト。朝鮮戦争に出兵した元兵士であり、その後アメリカ繁栄の

象徴でもあったデトロイトの自動車工場で優秀な技術工として働く。退職後はデトロイトの自宅に妻と暮らしていたが、その妻にも先立たれ独り身になってしまう。

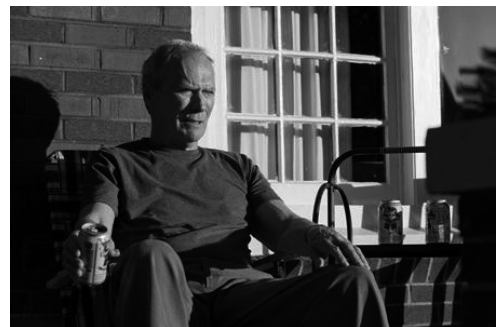
人は誰しも過去の栄光が忘れられない。ウォルトにとって、その象徴といえるものが自ら設計に携わったフォードの名車「グラン・トリノ」だ。そんなクラシックカーを今も庭にデンと据えて、いつもピカピカに磨くのが彼の日課でもある。

そして、そんな古きよき時代とあまりにも様変わりした最近の世の中が彼には許せない。息子たちは見栄ばかりを考えており、その娘はへそにピアスといった不道德極まりない出で立ち。当然、彼はそんな子や孫たちに苦虫を噛み潰した表情で接し、毒づく。それだけではない。教会の若い神父には「頭でっかちの童貞」などと毒づき、自動車産業の衰退とともに自宅周辺が移民による多民族の町と化したのに対しても容赦なく差別的な暴言を吐く始末。一般に「偏屈老人」とか「頑固老人」とか言われそうなウォルトだが、これは

少なからずこの高齢者にもありがちな態度である。日本だって、高度経済成長を支えてきた今の高齢者には、現代という時代は果たして素晴らしい時代と映っているかどうか。

さて、ウォルトの隣に住んでいるのもアジア系移民モン族の一家。その少年タオが同じ移民の不良グループに誘われ、こともあろうにウォルトの宝物である「グラン・トリノ」を盗もうとする。ウォルトは、彼にライフルを向けて追っ払うのだが、これをきっかけにタオとその一家との交流が始まる。

最初は鬱陶しく思っていたウォルトも、タオの家族たちの伝統文化に裏打ちをされた人間的な温かさにはだいに馴染んでいく。とくにタオの姉、スーの明るさにウォルトの心もほぐされていくのだった。そして、盗みに入ったお詫びにと、タオがウォルトの家の手伝いを申し出て、芝刈りや家の修理などを黙々と真面目に行なうようになる。内気で自閉症気味だったタオのそんないきいきとした様子を見たウォルトは、建設会社への就職の斡旋などもしてやる。ウォルト



『グラン・トリノ』クリント・イーストウッド

トは、タオに肉親以上の情愛を感じていたのだろう。タオの未来を応援してやろうという気概が強く伝わる。

この辺は、同じ監督・主演作の『ミリオンダラー・ベイビー』における貧しいけれど夢に挑む若い女性ボクサーと、彼女を親身になって育てる老トレーナーとの関係に似ている。いずれも一生懸命生きようとする若者に温かいまなざしを向けようとするイーストウッドのやさしさがうかがえるところだ。

一方、町の不良グループは、自分たちを裏切ったタオに対して、執拗に暴力を振るうようになる。

その都度、ウォルトが助けに入るわけだが、ついには彼らは姉のスーにまで魔の手を伸ばし、集団レイプで彼女をボロボロにしましう。そして、タオの家にも銃弾が……。

「こいつらがいるかぎり、タオやスーの未来はない」

こう思ったウォルトは、とうとう我慢しきれず立ち上がる。タオに、もし自分が死んだら「グラン・トリノ」はお前にやると言い残して、単身不良グループのアジトに乗り込むのだった。

こういう流れになれば、これまでのイーストウッドの主演作、監督作の多くがそうであったように、正義のため、愛のために敵をやっつけてくれるだろうと、誰もが期待するはずだ。それは、遠く『荒

野の用心棒』から始まって『ダーティー・ハリー』シリーズ、『許されざる者』そして監督作の『ミスティック・リバー』などを観れば明らかだ。

ところが、この作品には想定外の結末が用意されていた。不良グループの銃口が向けられる中、スックと仁王立ちのウォルト。やお上着の内ポケットに手を入れた瞬間！、ここで観客は、銃を取り出していつもの早撃ちで相手を皆殺しにしてくれるだろうと思ってしまうだろうが、さにあらず、なんと、それは単にタバコを取り出したところだけで、無残にも彼らの銃弾で蜂の巣のようになって崩れ落ちたのだ。なんとというショック。イーストウッドが殺される場面を初めて見せた瞬間だった。

思えばこの場面、あのマカロニウエスタンでの映画デビュー作『荒野の用心棒』のクライマックスを彷彿とさせるシーンだった。

「ここを狙って撃ちな」と胸のあたりに手をやって相手を挑発し、何発も銃弾を受けるが、そのたびに立ち上がっていたあのシーンだ。なんと弾除けの鉄板を胸に取り付けていたというあの有名なトリック。

しかし、この『グラン・トリノ』には鉄板は存在しなかった。あえて相手に丸腰の自分を撃たせて、彼らの刑務所入りを確実なものとし、それによって自分の子のように愛してきたタオたちの明るい未来を保障してやりたかったのだ。崇高な死である。

彼がこんな自己犠牲とも言うべ

き死を選んだのは、若い頃、朝鮮戦争で何人もの人を殺してきたことの贖罪的な意味で二度と人を殺したくないという思い、それと吐血を繰り返して老い先長くない自分の生き様をこういう形で締めくくりたいという思いもあったからだろう。それにしても、見事なラストであるとともに、だからこそ俳優としてのクリント・イーストウッドのラストメッセージだといわれるゆえんでもある。

どんなに偏屈で頑固と思われようとも、若者の未来に希望の灯をともす良心と生き方だけは忘れまい。世の高齢者にこんなメッセージを贈ってくれた『グラン・トリノ』は、今年79歳になるクリント・イーストウッドの乾坤一擲の傑作である。

エノケンよありがと

河野章

私は、エノケンが木の足を使って演技をしている姿、いたいたしくて見ていられない。テレビで「エノモト先生」と呼称しているのを聞いたことがある。なぜわざわざエノモト先生と呼ぶのだろうか。エノケンで呼んでよいのではないか。そして自分の足で演技しているエノケンを安心して見たい。

代表作の一つとして、まず『ベンゲットの

星』をとりあげたい。フイリピンで言語に絶する苦勞をしたベンゲットの多吉。自らを物語る時「ベンゲットの多吉はな……」話し終えた時に昇天している。壮烈ともいえる姿そのものである。このような演技を見て深い感動を覚えたのは私一人ではあるまい。この一作はエノケンの演技力を目のあたりに見た私の忘れえぬエノケンの名演技であろう。続く第二作は、全くの異なる喜劇である。今にも斬られそうでなかなか斬られない。間の面白

さを堪能できる作品であり、涙が出るほど面白かった。今か今かと斬られるのを待つ楽しさ、そして笑い、エノケンの演技の多様さを見せつけられる芝居であった。

木の足をつけての演技は私にとって、痛々しくて見ていられなかった。一代の名優、エノケン（榎本健一）。このような喜劇役者は、二度とあらわれぬであろう。エノケンよ、ありがとと心から礼を述べたい。

N雄とN子のシネマ対談

「ワルキューレ」
(監督＝ブライアン・シンガー)

ヒトラーを扱った作品に
駄作はない、という
ジンクスは不変！

N雄「みんな興味あるし、悪の対象としては申し分ない。」

N子「それに話のネタが豊富だからでしょ。」

N雄「最近では『ヒトラー最後の12日間』『ヒトラーの贗札』『わが教え子ヒトラー』とか、いずれも興味深い作品がそろってゐる。」

N子「チャップリンの『独裁者』もあった。他の作品にも、悪役としてちょいちょい顔をだしてるしね、ヒトラーは。」

N雄「彼は、人類が生んだ許しがたい人物。」

N子「数々の残虐行為をしたナチスの総統だからね。」

N雄「当時、ドイツ軍の中にヒトラーを倒そうとする軍人がいたんだな。すべてが彼に従っていたわけではないのが、少し救われる。」

N子「そのことがわかっただけでも、収穫だよな。」

N雄「ヒトラーが飛行機で登場するシーンはダイナミック。シンガーは動きのある場面が得意じゃないのかな。」

N子「戦争末期に近いから、古い飛行機みたかったけど。」

N雄「あれは、当時の飛行機を集

めて使ったそうだよ。」

N子「CGじゃないんだ。」

N雄「アフリカでシユタウフェンベルク(トム・クルーズ)が戦闘機に銃撃されるんだが、もつと傷ついても良かったんじゃないか。」

N子「左目と右手を失うんだけど、そういう風には見えなかった。」

N雄「シンガーがクルーズに遠慮したんだよ。やれっっていえば、やったと思うな。」

N子「不自由な手で軍服をやっと着るシーンがでてきた。簡単じゃないよ。」

N雄「爆薬をセットする時も、必死だった。」

N子「片目だから遠近感も狂うし、大変。」

N雄「1回目の暗殺は中止。が、あそこでやっとけば歴史は変わったかも。」

N子「ヒムラーがいなかったんでしょ。まとめて抹殺しようとした。」

N雄「2回目、成功したかのように見えるがツメが甘い。しっかりと確認しないと。」

N子「爆発を確認すると、シユタウフェンベルクがすぐベルリンへ行くからね。会議の場所が変

わったのも不運だった。」

N雄「早く離れないと捕まってしまうからね。」

N子「会議中に電話だからって、出て行くんだものバレルよ。」

N雄「ヒトラーは運が強い。何度も暗殺を逃れてるんだろう。」

N子「反対に仕掛けた側は、運とツギがなかった。」

N雄「暗殺派は、クーデター用のワルキューレ作戦をうまく利用して新政府を作ろうとしたわけだが。」

N子「本当にヒトラーの死を確認しないと、動けないという慎重派の大将もいたけどね。」

N雄「誤報だったら大変だから。最後には押し切られたが。」

N子「シユタウフェンベルクは、ヒトラーだけ倒してもだめで、ナチス政権まで倒さないと成功しないと思ってたのよ。」

N雄「親衛隊とかゲシユタポとかがいたからね。」

N子「作戦が成功しそうになるけど、肝心のヒトラーが生きてるんだもの。部隊は彼に従うよ。」

N雄「予備軍の指揮をとってたレーマーをトーマス・クレッチマーが演じてた。」

N子「彼は軍服が似合うし、とく

N子「ヒトラーの映画って、ハズレがないんだってね。ジンクスらしい。」

N雄「意図がわからない。興行成績がすべてのハリウッド作品(英語圏)だから、そこまでは望めないか。」

N子「最初から英語でやってほしかったよ。」

N子「日記のナレーション、ドイツ語だったよね。これはドイツ語でやるのかと思ったら違った。」

N雄「いつのまにか英語になってたよ。ドイツ語で作ってくれたらまた印象が変わったな。」

N子「最初から英語でやってほしかったよ。」

N雄「意図がわからない。興行成績がすべてのハリウッド作品(英語圏)だから、そこまでは望めないか。」



『ワルキューレ』トム・クルーズ

にドイツ将校がね、びったし。」
N雄「レーマーがゲッペルスにヒトラーの声を聞かされるシーンが、後半の山場。」

N子「もし、逮捕されれば死ぬ気だったんだよ、ゲッペルスは。」
N雄「口の中に入れてたのは、毒薬だろう。」

N子「あれで、この暗殺が失敗に終わったんだよね。なかなか計画通りにはいかない。」

N雄「失敗し、みんな処刑されるが、シユタウフェンベルクが最後に『ドイツは永遠だ』って叫ぶところが胸を打つ。」

N子「一緒に戦ったヘフテンが背中を撃たれるシーンもね。」
N雄「ヒトラーって、そんなに大きな体ではなかったんだ。むしろ小さい。」

ろ小さい。」

N子「声が合わなかった。しゃべらせない方が良かったよ。」

N雄「暗殺が失敗に終わってることは、みんな知ってるわけだから、そこにいくまでの過程を見せていく作品だったな、これは。」

N子「結果がでてるんで、そのぶん冷静に見えるよね。」

N雄「ヒトラーが死んでたら、状況が変わってたかな？」

N子「少しは、良い方向に進んだんじゃないかな。」

N雄「彼も画家になってれば、人生も変わった。」

N子「独裁者にはならなかったと思う。」

N雄「ユダヤ人のシンガーが、ヒトラー暗殺を描いたつてのが深い。」

N子「政府側と暗殺にかかわった人たちを演じた豊かな脇役陣がクルーズを助けたね。」

N雄「彼らが、力演しすぎのクルーズを支えてるんだよ。」

N子「彼はいつもやりすぎなんだよね。」

N雄「そこがクルーズの取り柄だからな。」

* N雄 (88点) N子 (88点)

おっとりとした味わい

「人生に乾杯！」(ガーボル・ロホニ)

ハンガリー映画。おっとりした味わいのある映画だ。高齢者版「バニシング・ポイント」かと思わせる展開だったが、にやりとさせる結末だった。男女のお年寄りの銀行強盗は、高齢者版「俺たちに明日はない」を思わせるが、もちろんずっこける老夫婦を演じる二人の老俳優(エミル・ケレシユ、テリ・フエルデイ)がいい。女刑事のユディト・シエルもいい。カメラはほとんど固定している。自動車内やヘリからの映像が移動撮影のように動く程度だ。年金だけでは暮らしてゆけない老人が強盗を犯し妻とともに逃避行。男女の刑事は恋人同士だったが、同居生活を解消、犯人を追う。

映画の冒頭、ソ連支配下の1950年代後半に主人公は政府の運転手をしていてある民家の捜査に同行する。そこで屋根裏に隠れていた女性を見逃す。この女性、反政府的な活動をしていたのだろう。話は現代に。二人は結ばれたらしく、年金生活をおくっている。税金が払えずに年老いた女性は夫の蔵書を没収されないように自分のダイヤの耳飾を係官に差し出す。これ

を見て——年老いて大事な装飾品を借金代わりに差し出さなければならぬ国の無策に腹をたてたのだろう——夫は銀行強盗やコンビニ強盗を始める。しかし、すぐ足がついてしまう。警察に協力するかに見せて妻も夫といっしょに逃げる。ふたりで銀行強盗。銀行は昼休みは行員もお客もいない、閑散としている。のんびりしたお国柄。市民の反応は、安い年金に不満をもつて立ち上がったとして高齢者の二人に好意的。安い年金は元社会主義国でも問題になっていたのだ。老夫婦は昔交通事故で亡くなった息子の墓へと向かう。警察のほうでは、元恋人同士が老夫婦を追う。女の刑事が怪我をして犯人の車に同乗することになった。拉致されて人質になった形だ。そのうち、老夫婦と女刑事の間に心の交流が。最後は女刑事を解放して老夫婦は「バニシング・ポイント」よろしくシヤベルカーに激突、かと思いきや——。女刑事は子供をみごもっていて男刑事とよりをもどす。最後に冒頭での若かりしころの二人のやり取りが映し出される。男はダイヤの耳飾の代わりを女に助けたように思えたのだが、実は——。

生と死、老いと生れ出る命。「人生に乾杯！」とはいいいタイトルだ。(せ)

シネマ・ギャラリー 7

鶴田 聖



【筆者からひとこと】一番最初に公開されたスターウォーズの登場人物たち（ヨーダは特別出演）です。スターウォーズの日本公開前に、子門真人が歌うスターウォーズのレコードがあつたのですが、その、映画とはかけ離れたイメージの歌の、チープな感じを思い浮かべながら描いたりしてみました。が、結局ブツのイラストになってしまいました。

嫌な女と思っていたが…

ノン子 36歳（家事手伝い）

里中智子

仕事もプライベートもそこそこ順調だったのに、ある日突然失ってしまったら人はうろたえるだろう。そして絶望的な状況に怒り、そのうち怒ったところで仕方ないと諦め、すっかりやる気をなくしてしまふ人もいる。ノン子はそういった経験を負って実家に身を寄せているようだ。もちろん家族は事情を知っているだろうが、どう接していいかわからずとまどうばかりである。ノン子も実家に戻った甘えもあって家族をうとうとしがっている割には、働く気もなく毎日ブラブラしているだけのように見える。

ノン子は引退する前は、芸能人として何本かの番組に出演するなど町の人はみんな彼女を知っている。それが今は引退して実家にいるのだから、近所の人たちからは遠巻きながら好奇の目にさらされていただろう。そんな周囲の目を意識してか、ノン子は他人様の前でもいつもふてくされてただ無気力に生きている。坂井真紀がこんな嫌な女を好演している。

映画の冒頭は、一人の若者（マサル）が、電車に乗ってノン子の住んでいる田舎町に降り立つところから始まる。マサルは自分の夢を実現させるために縁日に店を出し資金を稼ぐためにやって来た。普通に考えれば、誰でも簡単に店を出させてもらえるはずがないだろうと思うのだが、マサルは境内にシートを敷いたりして勝手に下見を始めてしまう。その様子を見て慌てた神社の人が、商売の関係は地元の元締めが仕切っていることを告げ、神社の娘であるノン子にマサルを案内させる。

元締めにしてみれば、いきなり現れて店を出させてほしいとお願ひされても、今回は既に出店する人は決まっているわけで、簡単にどうぞとは言えない事情もありマサルはあっさり断られてしまう。マサルは一瞬キレたのではないかなと思わせる態度に出るがその場は抑え、帰り道、ノン子に渡世の世界は義理人情だからきつと出店させてもらえと何の根拠もない自信を語るのだった。マサルは成り行きでノン子の家に居候して、祭りの日を待つことになる。

そんなマサルにはじめは無関心だったノン子だが、自分の夢を熱く語る姿や、嫌な顔もせず家のことを手伝う素直な様子に触れることで、そして何よりも彼女に優しい彼に少しずつ心を開き始める。

ところがある日、もう一人の男が町に降り立った。その男はノン子の元夫で、芸能界復帰の話を携えて訪ねてくる。いかにも怪しくてノン子は最初こそ疑ってかかるのだが、意外にもあっさりと受け入れてしまう。元夫の鶴見辰吾が適役で、軽薄でいやらしい男を楽しそうに演じている。

ノン子にとって芸能界復帰をかけた祭りが終わればこの家から出ていくということは大きな希望だったはずなのに、その祭り当日に元夫から復帰話は借金の保証人になつてもらうための口実で丸つきり嘘だったことを告白され、おま

けにノン子の幼なじみ、それもお互いに意識し合っているような鼻持ちならぬ女と一つの間にか親密になり、二人で地道に借金を返していくと聞かされあまりのことに元夫を殴りその場を走り去つてしまう。

その頃境内では、土下座をしてお願いしたら店を出させてもらえろと勝手に思い込んでいるマサルが売り物のヒョコを持ち込み、当然許してもらえないはずもなく騒動が起こつていた。そもそもマサルが語る義理人情ってなんだろう。それを語る前にするべきことをしたのかと問いたくなるのだが……。

とうとうマサルは逆ギレしてチエーンソーを振り回し大暴れした結果、櫓を倒しヒョコをそここにばらまき境内をむちゃくちゃにしてしまう。気が済んだのか、放心状態のマサルが周囲を見回すとその中にノン子の姿を見つけ救いを求めるように手を差し出す。たじろぎながらもその手を握り二人はあるうことか逃げ去ってしまう。これってどうよ!! もしここで映画が終わっていたら金返せと言いたくなつただろうが、ここからの展開がよいので救われた。

二人は電車に乗り町を離れる。

二人の表情には晴れ晴れした様子さえあり、なんてバカな奴らなんだろうと思っていたら、途中下車した駅でマサルがタバコを買いにいつている隙にノン子は一人もと来た方へ引き返す。この場面は印象的だった。多分ノン子の中にはマサルと一緒にいきたいという思いもあったと思う。彼はノン子に対しては常に優しいし大切にしてくれる。36歳で何をしたいという夢もなく周囲からの視線にさらされながら生きるのは辛いものだ。だからいつそのことマサルと一緒に生きた方が貧しくても楽かもしれないけれども彼女は選ばなかった。彼女は今までのことを吹っ切ったのではないだろうか。現実から逃げたり、他人から与えられるものをただ受け入れるだけではなく、先は見えなくてもま、いいかみたい。

熊切監督が演出した嫌な女を見ていると、その描写のうまさは観察眼が優れているか自らの経験かどうかだろうと想像できる。ラスト、河原で鶏を追ひ回す彼女の表情から陰は消え、清々しささえ感じられるようだった。

「人生の師」の大切さ教わる

「いまを生きて」

藤井陽子

V6の岡田君が雑誌のインタビューで言っていた。

『今を生きて』で友達が死んだあとに吐くシーンがあるんですけど、なんで吐いたんだらう。これは誰が演出したのだらう。すげえ表現だなあって」

彼のこの感想が無性に気になって、「吐いた」シーンがどうしても見たくなり、それだけでレンタルに走った。見ると、もう20年前の映画だ。

進学校のエリート学生たちが新任のキーティング先生(ロビン・ウィリアムス)の型破りな詩の授業を受けることから、人生を情熱的に能動的に、そして「いま」に精一杯力を注いで生きていくことの素晴らしさに目覚める。

触発された仲間同士で夜な夜な繰り広げられる「死せる詩人の会」。秘密基地の中で自作の詩を披露し合う。十代の多感な心が紡ぎだす荒削りでピュアな旋律……とは思わなかったけど、彼らの生活が充実感を増していくのが手に取るようにわかった。

仲間の1人に親の言いなりで生きてきたニール(ロバート・ショ

ーン・レナード)がいる。自らが本気でやりたいことは演劇だと気づき、打ち込むようになったが、彼の父(同じエリートで厳格)はどこまでも大反対。それでも演劇に打ち込む自分の姿を見れば父も変わると信じるニール。しかし結局、彼の希望はうたかたの夢に消え、さらに巨大化してしまった父との溝。絶望の暗闇の中で身動きできなくなったニールは、父の銃で自らの命を絶ってしまう。

深い悲しみが降り積もったかのような雪の中を仲間たちは静かに歩いていた。真っ白な世界の中、先頭を歩くトッド(イーサン・ホーク)は「きれいだね」と仲間のほうを一度振り返り、その直後にうずくまって吐いてしまう。これが岡田君が言っていたシーンだった。

友の死を受け入れられずに混乱するトッド。友の死を受け止めきれず、どうしようもない衝動に駆られるトッド。岡田君が「なんで？」と思ったように、どうしてあの時あの場面で吐いちゃったのか、気にすれば限りなく気になり始めた。そして自分なりに分析してみた。

そもそもトッドは気弱だけどやさしくて、繊細な心の持ち主。まるで他人に対する怒りを知らないんじゃないかってぐらいの羽毛み

たいな柔らかさ。だけどニールが死んだことで、自殺に追い込んだのはニールの父親だという思いが怒りになって、その怒りはトッドにとつて未知の感情で、同時に悲しみもこの上ない喪失感もトッドのキヤパを超えた未知の感情と言っても過言ではなくて、完全なる「異物」として彼の心を占領してしまつて、「異物」だから外に出した(吐いた)……というのはどうだらう。一種の拒絶反応で、妊娠中の激しいつわりみたいな。

「死せる詩人の会」の仲間たち。彼らの心を劇的に変えたのはキーティング先生だ。彼は、人生を豊かに、「いま」という時間を充実させて生きることの意味を彼らに教えた。人との出会いが大事。ぐりぐりと見回せば、一生ものの財産になる出会いをした人が誰にでも必ずいる。そして、自分が自分の色で存分に輝いていける生き方を教えてくれた人がいるなら、それは「師匠」と言えるかもしれない。彼らにとつてのジョン・キーティングは、まさに教師であり「師匠」だ。

自分にとつての「師匠」を持つている人は、きつと強い。人生の途中に何があっても、最後は強い。それに気づけばラッキーだ。

重いテーマをコミカルに

ウエイトレス
～おいしい人生のつくりかた

堀江広子

田舎町の女性が主人公

横暴な夫から逃れて自立を果たす女性の物語。重いテーマをコミカルなタッチで描いている。(二〇〇六年製作・米) 舞台が田舎町という設定がいい。

アメリカ南部の田舎町に住む若い主婦ジェナは、母親仕込みのパイ作り名人。オリジナルなパイのアイデアが次々浮かんできては試作し、仕事にも生かしている。

とりあえずの目標は隣の町のパイ・コンテストに出場すること。いずれ全米パイ・コンテストに出場して店を持つのが夢である。

職場はパイ専門レストラン(アメリカではこういうお店をダイナーと言らしい)の《ジョーのパイの店》。店のオーナーであるジョーは、手広く商売をやっているが、身寄りもなく年老いてきたジェナのパイが大のお気に入りなのに、店にやって来ては彼女に憎まれ口を叩く。ジェナは口うるさい父親のように思っているだけだ。二人の軽妙なやり取りが楽しい。

同僚は、恋など無縁だと思いついて、年を離れた寝たきりの夫の面倒を見ているベッキーである。

さて、ジェナには大きな悩みがあった。しょっちゅう暴言を吐き、時に暴力までふるう夫とは別れたいと思っている。ところが、予定外の子どもを宿してしまったのである。

映画の前半にこんなシーンがある。嫉妬深い夫アールは、仕事を終えたジェナを毎日迎えに行く。店の裏手にクラクションを鳴らし続けながらデカいアメ車でやって来る。はた迷惑なこんな夫はジェナでなくとも願ひ下げである。

アールはいつも、ジェナの稼ぎを取り上げてしまう。何でも買ってやっつけるのだからお前には要

らないはずだ、パイのコンテストなんかに出る必要はないだのと、身勝手な事を言いたい放題だ。

ジェーンは、ドーンとベッキーから贈られた赤ちゃん日記に、申し訳ないけどあなた(赤ん坊)が生まれてくるのが喜ばない、内緒でへそくった逃走資金もアールに見つかって殴られ、咄嗟に思いついた言い訳のために、あなた(赤ん坊)のベビーベッドやチェストに化けてしまったなどと泣き言を書き始末であった。更に、アールは子どもよりも夫である自分を大事にしますという誓いをジェナに強要する。そんなアールに彼女は心底うんざりする。

然し、憂鬱なこの暮らしは、産科医のポマター先生と出会ってからは急展開。

心を通わせ合えるポマター先生との逢瀬は、ジェナの暗い気持ちをはぐしていく。

彼女は、繰り返される夫の暴言で心がすっかり萎縮してしまっていた。ポマター先生はそんなジェナを励まし、彼女の作るパイを絶賛した。アールとの結婚後忘れてしまっていた心からの喜びを取り戻せそうに思っていた。だが、同時に自分の不道徳に後ろめたさも

感じていた。オーナーのジョーも、ジェナの不倫の恋をたしなめた。やがて臨月を迎え、いよいよ出産というときに立ち会った彼の妻(研修医)を見て、やはりポマターと別れようと決心する。

あれほど望んでいなかった赤ちゃんを胸に抱いたとたん、かけがえない愛しさを覚えた。そして子どもと共に絶対幸せにならなければと、遂に夫のアールに離婚を宣言するのだ。

癌を患い死期の迫ったオーナーのジョーが、秘かにジェナに小切手を用意していた。

数年後、全米パイ・コンテストでジェナは優勝を果たし、ジョーの店は《ルルのパイの店》というダイナーに。ドーンもベッキーも店で働いている。仕事を終えて、ルルと名づけた子どもとふたり家路につく幸せそうなジェナの姿があった。

自立へのカウントがこっぴい

この映画、公開後全米で予想外の大ヒットをしたそうである。

主婦ジェナの悩みが特別ではなく映画を観た人たちのと似通ったものであり、幸せを求めるジェナの姿に多くの女性が共感したので



『ウエイトレス～おいしい人生のつくりかた』

ろう。
映画には女性が自立を果たすのにお金の他に何が大切か、ヒントがふんだんに詰まっている。

一つ、ジェナはお腹が大きくなりながらも仕事を辞めなかった。

二つ、恋をする事により自身身を取り戻し、パイの店を持つ夢を失わなかった。

三つ、いざという時には頼りになる友を持っていた。特にジョーは人生の分岐点で大いに役立っただろう。ジェナがポマターとの駆け落ちを思い留まる賢明さを持っていたのも、ジョーの言葉が頭を離れなかったからだろう。

ヒットした理由はもうひとつあ

ると思う。ジェナをはじめ登場する人々は、それぞれに弱さや寂しさを抱えて生きている。同じ仕事場で些細な喧嘩をしながらもお互いに何となく助け合って生きているのが見えてくる。映画は、そうした人々の営みと人生に、限りなく温かい眼差しを向けているのだ。

例えば、ジョーの店の雇われ店長カルは見た目も怖いし、人の顔を見れば「早く働け」と気難しく口やかましい男性である。

だが、ジェナが妊娠したとき「いっそうにかまわん、続けて働いてくれればいい。産気づいたら店の床で産んでもいいぞ」と乱暴な言い方ではあるが、仕事を続けて欲しいという意思表示をする。

冷淡なんだか優しいんだか分からない人だけど、仕事を続けることが出来た事はジェナには幸いだったと思う。クビになって家に引込んでしまったら、アールとの息の詰まるような生活にジェナの心は壊れてしまっただろう。

ジェナの同僚ドーンは、容貌に劣等感を持っていた（とてもチャームिंगに見えるのだけど）恋愛に臆病。それでも紹介デート（合コンのようなもの？）に出かけていくと、相手の男性がドーンに――

目惚れ。以後毎日店に押し付けてくる変わった人が、付き合ってみると実に誠実さに溢れていて、ドーンはどんどん惹かれていきとうとう結婚に至った。ジェナの出産後、アールと決別して行くところのないジェナ親子を自分の家に滞在させるドーンは、案外頼りになる人なのかも。

ベッキーは、店長カルといつのまにか男女の関係になっていて、それを咎めるジェナやドーンを尻目に「カルとの付き合いは唯一の楽しみ。寝たきりの夫がいる家に毎日帰るのよ、それぐらい何が悪いのよ」とサバサバとして開き直る。容貌も性格もラテン系(?)を思わせる。

そしてオーナーのジョーは、頑固者。しかし事業を成功させるのにひとかどの努力をしているはず。何度も離婚を繰り返しているところをみると女運が悪いのか、或いは妻となった女性に対してはアールのようになるのか。少なくともジェナを見る目に間違いはなかったということだ。

ドーンの結婚式に自分の店を開放する気のいい面も覗かせていた。

ジェナの恋は革命だった

産科医のポマター先生は、研修医の妻がいながらジェナに恋をしてしまう、ちよっと流されやすいタイプ。ジェナの境遇に深い同情を寄せたのだろう。

ポマターの存在は、ジェナが新しい人生を踏み出して行くのに必要だった。ポマターという人物は、そもそもジェナの暮らす町の人間ではない。彼は地元の産婦人科に臨時で派遣されてきた医者である。確かコネチカット州から来た。

つまり、よそから来てジェナの住む田舎と違う価値観をもたらし、彼女がその影響を受けたと考えていいのではないか。大げさに言えばジェナの恋は革命だったのだ。

新しい風とも言うべきものが、ジェナを変えた。人は、人生の再出発をする時、それまでの環境や人間関係を断ち切ってしまう事がある。だが、ジェナはそうしなかった。自分を育んだ土地に愛着を持ち、人間関係も持続させながら、自分自身を解放し夢を叶えるというひとつの生き方を見せてくれたのである。

原題は「Waitress」である。

いかにも無機的で事務的な響き

である。内容は裏腹の明るさ。この落差がイカシテルではないか。なのに「おいしい人生のつくりかた」を付けたのはまことにもって無粋と言わざるを得ない。

ジェナを演じたのは、ケリー・ラッセル。地味な印象だけ大変な美人女優。ジェナのキャラクターがぴったりだった。

監督はエイドリアン・シエリー。実はジェナの同僚、ドーンを演じている女優さんでもある。

しかし、この映画を製作した2006年にアパートの騒音を巡るトラブルで殺害されてしまったという。

生きていたら、女性が元気の出る映画を沢山撮って活躍しただろうに、本当に残念なことである。



【筆者の近況】《花》と名づけたネコを飼い始めて一年。外が大好きである。でも車が危ない。よその花壇や畑で用を足すと迷惑だし。仕方なく木の枝にリードをくくりつけて1m四方だけ自由に。かくして今日も、若い《花》は虫を追って野生に生きている。私はと言えばますます衰えてきた老眼と闘い世俗に生きている。

ブックエンド

「月光仮面」を創った男たち
(樋口尚文・平凡社新書)

テレビ繁栄の端緒
となる作品

映画界からテレビが一段低く見られていた時代。昭和33年(1958)、東京タワーができたころ。機材も金もないなかでテレビ映画の製作に情熱をかけた男たちがいた。

男たちは、宣弘社の小林利雄社長。原作者の川内康範、プロデューサーの西村俊一、監督の船床定男、スタントマン・製作補助の野木小四郎、俳優の大瀬康一ら。

番組製作のいきさつ、製作に関わった男たちの横顔、製作現場のこぼれ話、主演・大瀬康一のインタビューなどから構成され、テレビの繁栄と映画の衰退を象徴するエポックメイキングとなった「月光仮面」の意義を探っている。

船床は、伊藤大輔監督のもとに弟子入りしたのを親からとがめられ勘当された。カッドウ屋はヤクザな商売と見られていたことはよ

く語られるところだ。船床は、加藤泰監督とは伊藤大輔監督の兄弟弟子だった。意外な関係。1952年、加藤泰らが結成した劇団「こもり座」に入る。加藤泰は宝プロで「剣難女難」を監督する。船床は加藤のもとで宝プロの助監督となった。プロデューサーの西村と船床は、綜芸プロ(嵐寛二郎の「鞍馬天狗」などを製作)で1951年に出会っている。「京都の撮影所にいつ行ってもいる奴がいた。それが舟床で、ほとんどセットのなかに寝泊りしている感じだった」。

舟床と西村は、「月光仮面」前年の1957年東宝映画、本多猪四郎監督の「わが胸に虹は消えず」の現場で、それぞれ助監督、製作主任という間柄でもあった。



撮影現場では、カメラは手回しの16ミリカメラ。28秒しかフィルムをまわせず、カット割を多くせざるをえなかった。それがスピードディーなアクションとなつて評判をよんだ。朝早くから夜遅くまで映画の撮影に明け暮れた。1日に150カットとすることも珍しくなかつたという。船床は、のちの「隠

密剣士」のころ、兄弟子・加藤泰にならつて地面を掘つてカメラを穴の中に据えてロー・アングルで撮つたりした。「豹の眼」「怪傑ハリマオ」「隠密剣士」などのヒット・テレビ映画を撮る。本編では「大忍術映画 ワタリ」「隠密剣士」を撮った。

のちに西村は、「水戸黄門」「大岡越前」「江戸を斬る」などの時代劇をプロデュース。

野木は、「月光仮面」のロケのときにオートバイのスタントを見て、「下手だな」とつぶやいたところを監督の船床にジロツとにらまれ、「君、できるの」と言われたのがきっかけで製作を手伝うようになったという、おおらかな時代を感じさせるエピソードだ。のちに、山口百恵の「赤い迷路」「土曜ワイド劇場」「火曜サスペンス劇場」をプロデュースするようになる。大島渚の「白昼の通り魔」の製作進行も担当している。

(流 漂介)



序

あるスーパーヒーローの
プロフィール

バットマン論

久保嘉之

つた名前の（このネーミングは、テレビ放映の際、日本人が考えたものだという話は、あとで知った）敵役がいるのも知っている。

子供の頃、TV放映されていたものを観たことがあるような、ないような、この辺の記憶になるとかなり曖昧で、私が育った日本も西のはずれに位置するローカルではたして放映されていたのだろうか。

ジョーカーやペンギンやキャットウーマンやナゾラーたちと、潜水艦（だったと思う）の上で、バットマンとロビンが追いかけてこをするシーンも覚えがあるのだが、それがTVシリーズの一篇なのか、はたまた古い映画を手当たり次第ビデオで観ていた時期に、たまたまレンタルしたTVシリーズを映画化したもの（レスリー・H・マーン・ティンソン監督による『バットマン』がそれだと思う）であるのか、判然しない。

ことほど左様に、バットマンの記憶は模糊として覚束ない。

ありていに申し上げると、私はバットマンにそれほど興味も関心も、持っていないかったのである。いや、違う。興味も関心も持たなくなった理由を、この稿を起

こすにあたりバットマン映画の歴史を調べていたら、ふと町山智浩氏の一文を眼にして、卒然と思いついた。私は確かに、十五六の少年時代に、バットマンのTVシリーズを観ている。

「66年、『バットマン』（68年）はTV化された。コメディーとして。ポップアートとサイケの時代だった60年代を反映し、赤や青のカラフルでド派手な衣装をつけたジョーカーやリドラー（日本ではナゾラー）がカリフォルニアの抜けるような青空の下をはしやぎ回る。TV版『バットマン』はアメリカでは『キャンピング（オカマつばい）』『美学の究極と言われた。特にロビンとバットマンの関係は意図的に同性愛的に描かれた。この陽気なTV版が何年も続いたせいで、バットマンが非情のダークナイトだったことは忘れられてしまった。」（町山智浩）

私は、人情喜劇めいた類のコメディーは好んで観たが、ドタバタといおうかスラップスティックは大嫌いな、変な子供だった。カラフルな衣装だったそうだが、当時我が家のテレビはまだ白黒画面だったと思う。だから色についての記憶はないが、意味不明にやたら追

いかけっこをしているだけの物語を、「何だ、これは？」半ば啞然として観たのだろう。そして観る価値なしと、切り捨てた。もうひとつある。同性愛的に描かれたロビンとバットマンの関係に淫靡な臭いを嗅ぎ取って、思春期特有の潔癖さから、おそらく嫌悪感を催したものと思われる。アブノーマルな性に関して、私は臆病なガキでもあったのである。

——TVシリーズを観なくなった理由に思い当たれば、私の記憶が混沌としているのも、納得できる。

一

ではなぜ、ティム・バートン監督の『バットマン』を観ようという気になったのだろう。やはり、ジャック・ニコルソンがジョーカーを演じるという、話題性だったように思う。それと宣伝のものの凄さ。

製作者たちは、ジョーカー役にニコルソンを熱望したという。で、結局出来上がった映画は、ニコルソンの完全な一人舞台。マイケル・キートンのバットマンぶりもなかなか颯爽としていただけ

バットマンを明確に意識しだしたのは、いったいいつ頃からだろう。やはり、ジャック・ニコルソンがジョーカーを、マイケル・キートンがバットマンを演じた、ティム・バートン監督による『バットマン』が、最初ということになるのだろう。それ以前、バットマンの存在は、無論知っていた。バートン監督版には出てなかったが、ロビン少年という相棒がいるのも知っているし、ナゾラーなどという人々を食



に、ちよつと可哀そうかな、という気もしたが、考えてみるとバットマンは、マスクに覆われて眼と口許しかあらわしていない。表情が読めないのだ。白塗りで目立つ上に、表情豊かに顔を作れるジョーカーと較べると、明らかに分が悪い。ニコルソンの演技の上手さも相俟って、キートンは割り食ってしまったようだ。思うに、製作者サイドには、ジョーカーの映画になってしまってもいい、という思惑があったのではなからうか。そもそもジョーカーという悪役は、バットマンとほとんど同時に生み出されたキャラクターで、『バットマン・コミック』の最初の号で死ぬ予定になっていたそうだが、「死なすには惜しい」という声で、中止されたという。40年のことである。爾来バットマンの

最大にして最強の敵となるわけだが、その人気ゆえに三十年後の70年には、主役として活躍するコミックが出版されたほどだという。人を魅了するカリスマ性を、持っていたのだらう。

幼児特有の残酷性ともいうべき悪魔を、滑稽な容姿の下に隠したキャラは、不可思議な魅力に充ちて、確かに演じ甲斐のある役には違いあるまい。ニコルソンはいきいきのびのびと演じていたし、クリストファー・ノーラン監督の最新作『ダークナイト』でのヒース・レジャーも、実に楽しそうに演じていた。（それだけに、ヒースの遺作になってしまったのは、かえすがえすも惜しまれる。）

『バットマン』のパンフ

ニコルソン演じるジャック・ネピアは、ゴッサム・シティを牛耳る犯罪組織の大立者カール・グリスム（ジャック・パランス）の片腕であったが、自分の地位が脅かされることを懼れたグリスムの罠に嵌り、有毒廃液のタンクに落ちてしまう。辛うじて一命は取りとめたものの、顔は醜く変形。整形するも完全には元に

戻らず、このとき以来白塗りのメイクで、名もジョーカーと改め、グリスムばかりかゴッサム・シティの市民をもターゲットにかけ始める。即ち死んだも同然の経験をする事で、自己の欲望にのみ忠実な、悪の化身として生まれ変わったのである。

ティム・バートン監督は、この手法を以て悪役にアイデンティティを賦与した、といえるかもしれない。二作目の『バットマンリターンズ』に登場するペンギンやキャットウーマンも同様に、死ぬ以上の精神的あるいは肉体的苦痛を経験させられることで、自身を悪の権化へと昇華させるのである。なぜ悪か？ 与えられた苦痛の根源が、正常と思われている社会、つまり一般社会の善人といわれる人々にあるからである。ジョーカーは、犯罪組織という裏社会に属していたわけだから言うに及ばず、ペンギンは生まれついてすぐ、そのあまりの醜さゆえ両親に捨てられた男、キャットウーマンは大富豪マックス・シュレック（嬉しいことにクリストファー・ウォーケンですよ）の有能かつ控えめな秘書であったが、そのシュレックにビル窓から突き落とされて、

実際に死んでしまった（？）女性である。

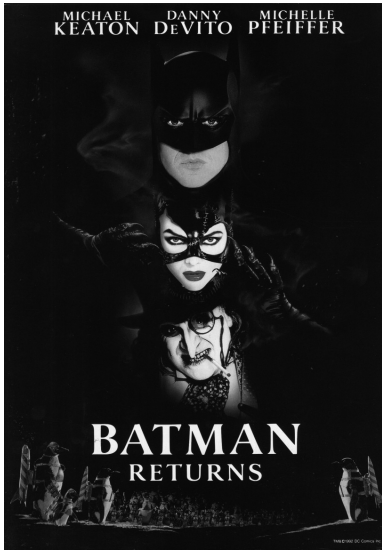
だからこそ彼らは、ゴッサム・シティの善人面した人々を憎み、蔑み、おとしめようとする。自分たちを疎外した市民に、復讐しようとしているのである。悪事を働く愉悅に、自らのアイデンティティを確認しているのである。

対するバットマンであるブルース・ウェインは、幼いとき眼の前で両親を殺されるといふ悲劇に見舞われた。それがトラウマとなり、ゴッサム・シティに蔓延する悪を一掃しようと決意する。だが彼自身が死の深淵を覗き込まれたことは、ない。だからまだ、正義というものを信じていられる。しかし逆にそこがバットマンの弱みでもある。徹しきれないのだ。正しいと信じる行いを断行していると思いつくとするも、一抹の懷疑を拭いきれない。したがってジョーカーやペンギンやキャットウーマンのように、自らの行動に陶醉することができない。ゆえに文字通り蝙蝠のように、獣でもなく鳥でもない中途半端な状態で、「正義」の御旗を掲げていたずらに飛び回っているだけなのである。

二

観方にもよるのだろうが、キャットウーマンとのラブ・ロマンスが成就しなかったのも、偏にバットマンのこの曖昧で煮え切らない態度が災いしていると、私には思える。

それはさておき、この『バットマン リターンズ』が、シリーズの中では一番好きな作品である。ペンギン（ダニー・デヴィート）もキャットウーマン（ミシェル・ファイファー）も、ジョーカーほどにはキャラクターが立ちすぎてはいないし、それだけにバットマンも非情のダークナイトとしてしっかり存在している。何より主人公も敵役も、黒暗黒の闇の世界で息づいているのが、いい。まるで



『バットマン リターンズ』のパンフ

曰く「全体が暗すぎる」という次第で、三作目の『バットマン・フオーエヴァー』では、監督がジョエル・シュマツカーに交替。同時にバットマン役も、マイケル・キー

007のアタッシュ・ケースばりにいろんな仕掛けが施されたペンギン愛用のバラソルや、ペンギン・コマンドの思わず吹き出したくなるような仰々しさに、さして違和感を覚えないのは、それらの向こうにペンギンの荒涼たる精神世界が、垣間見えているからである。

『ビートルジュース』のティム・バートン監督が意図したものは、バットマンを含めた精神的奇形児たちが跳梁跋扈する、暗く歪なゴッサム・シティであったと思われる。——だがこの映画は、健全な(?)精神を有する、私にいわせればバットマンの世界観を理解しえぬ観客や批評家の、不評を買った。

曰く「あまりにも悪役に、精神的に同調しすぎている」

トンからヴァル・キルマーに入れ替わった。

そしてである。この作品からロビン（クリス・オドネル）が登場してくる。ロビンですよ、ロビン。あろうことかこの監督さん、自身ガイであることを公言して憚らない人で、当然ロビンは、ガイの印であるイアリングを付けているし、バット・スーツの胸には、乳首がつけられるという念の入れよう。そう、TVシリーズのおちやらかな霧囲気とキャンブ美学が、ここに再現されたのである。とくれば、敵役のリドラー（ジム・キャリー）やトウ・フェイス（トミー・リー・ジョーンズ）も、否が応でもコメディイ演技を繰り広げるしかない。なんとというアナクロニズム。しかもである。ジョーンズはシリアスな演技の、どちらかといえば洪面役者。となればコメディイ大得意、ジム・キャリーの独壇場である。この映画も、かなりニュアンスは異なるとはいえ、一作目と同じくリドラーの映画になってしまっている。キルマーはバット・スーツを装着する際、お尻や股間をアップで映し出されるだけの、可哀想な存在と成り果ててしまった。

ゴッサム・シティも、暗く荒廃した街から、明るくカラフルでまるで玩具箱のような街に変貌。

前述の町山氏によると、マイケル・キー-tonは自ら降板したという。その理由というのは、シュマツカー監督が、

「ブルース・ウェインがトラウマから脱出する話にしたい」と持ちかけたからだというのだが、トラウマを克服してしまえば、バットマンに変身する意味がなくなってしまうのではないか。キー-tonのみならず、まさしく何をかいわんやである。

かくて——見事(?)にトラウマから脱出したウェインが登場してくる『バットマン&ロビン/Mr. フリーズの逆襲』は、バットマンの存在意義を疑わせ、批評家たちからは「オカマ・バーのショートタイム」だと酷評され、私はただただ呆然嘔然とし、興行的には大こけし、一作目の十倍近い制作費を溝に捨てた。

キャスティングは、申し分ない。流石にヴァル・キルマーも一作で嫌気が差したのだろう、バットマン役は、ジョージ・クルーニーと交替。ゴッサム・シティを氷の国に変えてしまおうとするフリー

ズ役はアーノルド・シュワルツェネッガー、誘惑フェロモンと猛毒キスを武器にするボイズン・アイビーに、『キル・ビル』のユマ・サーマンと、かなり豪華である。しかしお話のほうはというと……脚本はアキヴァ・ゴルドマンが担当しているが、いかに彼の才能を以ってしても、変身する意味を失くしたバットマンをどうすることも出来なかったとみえる。思いつき子供向けのストーリーに、堕してしまった。クルーニーは悪くなかったが、シュワちゃんも、何でこんな映画に出なくてはいけないのかと、ただ哀しかった。そしてバットマン・シリーズは、途絶えた。

三

七年が経った。
バットマン・シリーズの製作が、再開されることとなった。

「製作会社のワーナー・ブラザーズ映画がバットマンというキャラクターをまったく新しい形で作りたがっているという話を聞いて、僕のほうからブルース・ウェインがどうやってバットマンになったのかを語る物語はどうかと提案し

たんだ」新たに監督に起用されたクリストファー・ノーランの弁である。すでに『インソムニア』で薄ら寒くなるほどのジレンマと絶望を抱え、不眠症に悩まされる刑事をアル・パチーノに、温和な顔をしながらサイコな残虐性を持つ犯人をロビン・ウィリアムズに演じさせた監督の、着眼点としては尤もであつたかもしれない。

今回バットマンを演じるのはクリスチャン・ベール。

ノーラン監督は、ブルース・ウェインのトラウマを深く掘り下げた。

幼いころ誤って枯れ井戸に落ち、蝙蝠の大量に襲われた経験を持つブルースは、両親と芝居見物に行った折、演目に蝙蝠の恐怖を思い出し、閉演前に劇場を出たため、強盗に父と母ともに射殺されると

いう悲劇に遭遇する。すべては自分のせいだ。両親を殺された怒り、その原因が自分の怯懦にあるという罪悪感。犯人に対する熾烈な復讐心。長じてその時のトラウマに苦しむ彼は、長い長い旅に出る。

旅先で、犯罪者の心理を掴むために自ら入った刑務所を、ひとりの男が訪なう。ヘンリー・デューカード（リリアム・ニーソン）と名

乗るその人物は、ラーズ・アル・グール（渡辺謙）を頭目とする

「影の軍団」という結社の一員で、ウェインを出獄させ、自らの手で武術や格闘技を仕込む。ウェインの精神的肉体的素質に、目をつけたのである。「影の軍団」の目的は、世の中にはびこる悪人を殲滅すること。ウェインの上達ぶりは早く、いよいよ最終試験の時が来た。課題は、食べるために盗みを働いた男を殺せというもの。ウェインが悪と断じるのは、敵意を持って自らに害をなそうとする者である。しかも殺人は意に反する。拒絶したウェインに軍団が襲いかかる。倒壊するアジトの中の闘いで、結果的にウェインはラーズ・アル・グールを殺し、瀕死の傷を負ったデューカードを助け、去っていく。

因みにこのヘンリー・デューカードという人物は、バットマンの生みの親であるボブ・ケインの原作には登場せず、後にリニューアルされた物語（グラフィック・ノベルという）に登場してくるという。拙稿『デアデビル』でも少し触れたことだが、80年にバットマンのコミックは、フランク・ミラーの手によって、内面的屈折やキャラ

クターをより緻密に描くことで、一新されているのである。

ブルース・ウェインはゴッサム・シティへ戻ってきた。だが彼を待っていたのは、相も変わらず不況による貧困と犯罪が横行する、暴力都市であつた。彼は決意を固める。二度と両親のような犠牲者を出さないためにも、ゴッサム・シティを悪人どもの手から取り戻し、元の秩序と活気に満ちた街にしなければ。そのためには……

ウェインは、幼時蝙蝠の大量に脅えた。その恐怖により両親を死に至らしめた。重くのしかかる罪悪感。なぜ蝙蝠ごときに怯え懼れたのだ、という怒り。犯人、ひいては悪事を働く者たちへの、抑えようのない復讐心。だが両親は、罪は憎んでも人を憎むことはしなかった。その精神は受け継がなければならぬ。葛藤。トラウマ。得た結論は、悪を制するに「死」を以って報いてはならない自制を、際立たせることであつた。また刷り込まれた蝙蝠への恐怖も、克服しなければならぬ。それを逆手に取った。ウェインは敵を怯ませる目的のためだけでなく、自身身の恐怖に打ち勝つため、蝙蝠のコスチュームを身にまとうことに

する。かくしてバットマンの誕生である。

街を牛耳る犯罪組織のボスであるカーマイン・ファルコーネ、彼と手を携えて悪事にいそしむスケアクロウ（案山子）こと精神科医ジョナサン・クレイン（キリアン・マーフィー）、彼らを相手にバットマンは荒廃した都市の闇を、縦横無尽に飛び回る。だがスケアクロウの背後に潜む者は……

「ゴッサム・シティーはもはや救いようがないほど腐れきっている。だから街ごと消滅させる」と、再びヘンリー・デューカードがウェインの前に現れる。「影の軍団」の頭目ラーズ・アル・グールは死んだ。だがデューカードこそが、真



『バットマン ビギンズ』のパンフ

の首魁だったのである。——演じる『ダークマン』のリーアム・ニールソンが、すごくいい味と重厚さを出している。このキャスティングで、ブルース・ウェインひいてはバットマンの存在がリアリティを帯びた。

最後の決戦、暴走しまさに脱線しようとしているモノレール内での闘いで、バットマンは、

「私は殺さない。だが助けることもしない」言い放って、自分の師であった人を見捨てた。父が愛し貢献したゴッサム・シティーに仇なすものは、何人たりとも容赦しない。この決意をなしたとき、バットマンは非情のダークナイトとして、自己のアイデンティティ

ーを確立し得たのである。——暗闇の世界で息づくバットマンが帰ってきた。

四

さて、同監督による新作の『ダークナイト』である。どうしてバットマンといい、デアデビルといい、最近のアメコミのスーパーヒーローは、かくも苦悩するのだろうか？

観終わった後の感想が、それだった。

確かに司法社会においては、法が人を裁く。だがその法自体人が作ったものである。だから人は人にしか裁けない、というパラドックスが生まれる。いやそれはパラドックスではなく、それこそが真理なのである。ましてゴッサム・シティーのように司法が弱体化し、警察機構そのものが収賄と不正で正常に機能しない現状にあつては、警察業務を代行する組織や人物がいないと、市民の秩序と安寧は脅かされ続けるだけである。だからこそウェインは、悪に非情な暗黒の騎士として、よしや腐敗しきった警察に追われることになると、市民のために立ち上がろうと決意

したのではなかったか。

ブルース・ウェインは、なぜバットマンに変身しなければならなかったか。その答えは前作で出ているはずである。

ハービー・デント検事（アールン・エックハート）や、幼馴染の検事補レイチェル・ドーズ（他はすべて前作と同じキャスティングなのだが、彼女だけケイティ・ホームズからマギー・ギレンホールに変わっている）が、悪人を司直によつて捕らえ、司法に照らし合わせて裁きたいと躍起になるのであれば、その手助けをしてやればいい。仄かに思いを寄せるレイチェルに詰られたからといって、デント検事の正面きつて素顔で悪と向き合う姿勢に羨望を覚えたからといって、何を思い悩むことがある。捕らえて収監しても、すぐに逃げられてしまう。今のゴッサム・シティーの警察力など、その程度でしかない。まだまだバットマンが、因つて立つべき所以は、無くなつてなどいないのである。

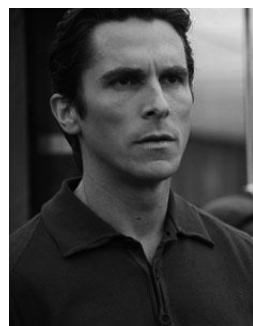
バットマン（蝙蝠男）は、悪人を恐怖させるバッドマン（悪漢）たるべきなのだ。暗黒の騎士の称号は、そのために与えられたのである。



『ダークナイト』ジョーカーのイメージイラスト＝中田好美

ウェインよ、トラウマを抱え、心の中の黒い闇を畏怖するのはお前一人ではない。実の父に口を裂かれ、犯罪者への道をひた歩んだ宿敵ジョーカーとてそれは同じ。醜く変形した顔をとどころこ禿かけた白塗りで隠し、裂かれた口はルージューで覆うも引き損なったが如きさま、その唇をチロチロと神経質に舐める舌。くしゃくしゃの髪は、今にも狂い出しそうな精神を、掻き乱すことでどうにか宥めている按配。だが彼は、心の奥底で冷たくとぐろを巻く闇を、“道具”として使うことを知っている。その道具を駆使して、善人の心の中に、恐怖と怒りを植えつける術を知っている。そして躊躇

しない。悪に徹し、悪事に愉悅を覚えるジョーカーのアイデンティティーは、中途半端な覚悟で打ち砕くことなど出来はしないのである。バットマンよ、懊悩の果てに招き寄せた結果を見よ。レイチェルを殺され、デント検事を自らの手で葬り去らなければならなくなつた責任は、すべてお前の優柔不断さ、徹しきれない弱さに由来しているのだ。――『ダークナイト』は私の見解とは異なり、頗る評判がいいようである。バットマンの母国アメリカでは、最近とみにベナルポピュレーション（厳罰主義）の風潮が高まつて



クリスチャン・ベール

いるという。凶悪犯罪の多発傾向が、その原因であろう。犯した罪に対して、罰が軽すぎる。もつと厳しい刑に処して欲しい。司法の手ぬるさを非難するのであれば、鉄拳で悪に制裁を加えるバットマンの存在は喜ぶべきである。だが当のバットマンは懊悩するばかりで、まったく生彩を欠いている。意気が上がらないときている。そういうヒーローを、果たして観客は歓迎するのだろうか。応援したくなるのだろうか。なぜこれほどこの映画が持て囃されるのか。ふと考えた。ダークナイトをバットマンだと思いついてから、苛立ちが生じるのではなからうか。無論、本編のラストでジム・ゴードン警部補（ゲイリー・オールドマン）が、ダークナイトとしてのバットマンの復活を予言する台詞があるから、そうには違いない。だが、もうひとりの主人公とでもいべきジョーカーを、〈負〉の

ダークナイトと見做したらどうだろう。

ヒース・レジャーの演技は、当然初代ジャック・ニコルソンとは異なる。ジョーカーに変貌する理由も違う。ニコルソンは死の深淵を覗き込まれたことで、狂気を生じ、悪の鎧を身に纏った。だから市民やバットマンを殺傷しようとする。だがレジャーは父親に口を裂かれて以来、憎悪のみを生きがいとしてきた。その深さは狂気すら超克してしまっている。彼は周囲の人々を肉体的に傷つけるだけでは、良しとしない。内面に入り込んで、精神的にズタズタにしなければ、気が済まないのだ。人間が生来持ち合わせ、必死に押し隠そうとする醜悪でおぞましい部分を、曝け出させなければ、おさまらないのだ。謂わば人が心の奥底に抱える暗黒を、恐怖と絶望という剣で、白日の下へ引つ張り出す騎士なのである。

――どうやら『ダークナイト』が好評なのは、ヒース・レジャーが表現してみせた新しいジョーカー像への、絶大な賛辞だと受け止めたほうが、私としてはすんなり納得出来るようである。

私のベスト60

吉田 修 関田孝正

吉田修ベスト60

私の優れていいと思う60本

「私のベスト60」を勝手に改題して「私の優れていいと思う60」と並列扱いで順位づけをしないという条件でまとめました。他人様の書いたものや、製作・監督などのスタッフと配役陣が織りなす総合芸術に、順位をつけるのがなんとも気ぶっせいなだけで、主義・主張を申しあげるものではありません。

洋画部門 (30作品・50音順)

・明日に向って撃て! 69米 ㊦ G
・ロイ・ヒル ㊦ ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード
・ブッチとサンダンスの強盗二人組。追跡隊に追われた二人は、ボリビアに高飛びするが……。
・アパートの鍵貸します 60米 ㊦
・ビリー・ワイルダー ㊦ ジャック・レモン、シャーリー・マクレーン
自分の部屋を上司の浮気用に貸

す男。が、憧れのエレベーター嬢が上司の愛人だった。

・雨に唄えば 52米 ㊦ ジーン・ケリー&スタンリー・ドーネン ㊦
・デビー・レイノルズ、ドナルド・オコナー
・トッキー初期の映画界を舞台に、若い芸人たちが成功を目指す。

・海の上のピアニスト 99米 伊 ㊦
・ジュゼッペ・トルナトーレ ㊦ ティム・ロス、ブルート・テイラー・ヴァンス
豪華客船の中で生まれ育ち、一度も船を下りなかった天才ピアニストの一生。

・汚名 46米 ㊦ アルフレッド・ヒッチコック ㊦ ケーリー・グラント、イングリッド・バーグマン
売国奴の父を持つ娘が、FBI捜査官の命令でナチスの大物に近づく。

・会議は踊る 31独 ㊦ エリック・シャレル ㊦ ヴィリ・フリッツチュ、リリアン・ハーヴェイ
ウイーン会議を背景に、ロシア

皇帝のお忍びの恋をロマンチックに。

・カサブランカ 42米 ㊦ マイケル・カーティス ㊦ ハンフリー・ボガード、イングリッド・バーグマン
亡命者たちの集まる地、カサブランカ。ニヒルな酒場経営者が再会した女は……。

・禁じられた遊び 52仏 ㊦ ルネ・クレマン ㊦ ブリジット・フォセー、ジョルジュ・ブージュリー
戦災孤児の少女と農家の少年の葬式ごっこ。ナルシソ・イエペスのギター名曲。

・グレン・ミラー物語 54米 ㊦ アレン・コーン ㊦ ジェームス・スチュアート、ジューン・アリスン
スイング・ジャズの人気者、グレン・ミラーの半生。妻との愛情物語を中心に展開。

・荒野の決闘 46米 ㊦ ジョン・フォード ㊦ ヘンリー・フォンダ、リオンダ・ダーネル
保安官となった、ワイアット・アーブとドク・ホリデイがクラントン一家と決闘する。

・シェーン 53米 ㊦ ジョージ・スティーブンス ㊦ アラン・ラッド、

ヴァン・ヘフリン
迫害される農民一家のため、流れ者が立ち上がる。ラストシーンが印象的。

・史上最大の作戦 62米 ㊦ ケン・アナキン ㊦ ジョン・ウェイン、ヘンリー・フォンダ
ノルマンディ上陸作戦の全貌をオールスタアで。モリス・ジャールの音楽もヒット。

・ステイング 73米 ㊦ ジョージ・ロイ・ヒル ㊦ ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード
30年代のシカゴ。チンピラ二人組が大物ギャング相手にイカサマを仕掛ける。

・第三の男 49英 ㊦ キヤロル・リード ㊦ ジョセフ・コットン、オーソン・ウェルズ
終戦直後のウイーン。友人の死の謎を探る作家が見出した事実とは?

・痴人の愛 34米 ㊦ ジョン・クロムウェル ㊦ ベティ・デイヴィス、レスリー・ハワード
若い医学生が奔放なウェイトレに溺れてゆく。原作はサマセツト・モーム「人間の絆」。

・逃亡者 47米◎ジョン・フォード◎ヘンリー・フォンダ、ワード・ボンド

カトリック禁止の30年代メキシコ。逃亡中の司祭は殺人犯と友情を結ぶが……。

・白屋の決闘 46米◎キング・ヴィダー

南北戦争後のテキサス。混血児を巡って兄弟が争う。

・波止場 54米◎イリア・カザン◎マローン・ブランド、リー・J・コップ

港灣を仕切るボスに、チンピラ青年が戦いを挑む。

・平原児 36米◎セシル・B・デミル◎ゲリー・クーパー、ジョン・アーサー

西部の伝説的人物ワイルド・ビル・ヒコックとカラムティール・ジエーンの恋物語。

・ベニイ・グッドマン物語 55米◎ヴァレンティン・デイヴィス◎ステイブ・アレン、ドナ・リード

キング・オブ・スイングと謳われたグッドマンのカーネギーまでの道。

・慕情 55米◎ヘンリー・キング◎ジェニファア・ジョーンズ、ウィリアム・ホールデン

中国人の女医とアメリカ人の従軍記者の恋。主題歌はアカデミー賞を獲得。

・炎のランナー 81英◎ヒュー・ハドソン◎ベン・クロス、イアン・チャールソン

24パリオリンピック。ユダヤ人と聖職者の息子は、各々の理由で陸上の世界へ進む。

・街の灯 31米◎チャールズ・チャップリン◎ヴァージニア・チェリル

盲目の花売り娘と知り合った浮浪者チャリリー。目を治すために奮闘するが……。

・真昼の決闘 52米◎フレッド・ジンネマン◎ゲリー・クーパー、グレース・ケリー

お礼参りに来た悪党どもに、たったひとりで立ち向かう保安官の苦悩。

・道 54伊◎フェデリコ・フェリーニ◎ジュリエッタ・マシーナ、アンソニー・クイン

大道芸人を買われ、苛め抜かれる少女。唯一心を許す青年が現れるが……。

・民族の祭典 38独◎レニー・リーフェンシュタール

長編ドキュメンタリー。36ベルリン・オリンピックの記録映画。

日本人選手の活躍も描かれたことで大ヒット。

・夜の大捜査線 67米◎ノーマン・ジュイソン◎シドニー・ポワチエ、ロッド・スタイガー

黒人ゆえに殺人事件の容疑者となった刑事が人種偏見と戦いながら解決するまで。

・ラストエンペラー 87伊英中合作◎ベルナルド・ベルトルッチ◎ジョン・ローン

清朝最後の皇帝・溥儀の数奇な運命を描く歴史絵巻。坂本龍一が音楽を担当。

・老人と海 98露◎アレクサンドル・ペトロフ

アニメーション。ヘミングウェイの原作を、完全アニメ化。油絵調のタッチが素晴らしい。

・ローマの休日 53米◎ウイリアム・ワイラー◎オードリー・ヘップバーン、グレゴリー・ペック

某小国のお姫様が大使館を一人で脱出。アメリカの新聞記者と恋に落ちる。

邦画部門 (30作品・50音順)

・雨あがる 99東宝◎小泉堯史◎寺尾聰、宮崎美子、原田美枝子

腕は立つが人がよい為仕官出来ない浪人。話の分かる殿様と出会

えたが……。

・あやに愛しき 56劇団民芸◎宇野重吉◎信欣三、小夜福子、田中絹代

長年の貧困から精神病院に入った妻。夫である私小説作家は、そんな妻を題材に。

・生きものの記録 55東宝◎黒澤明◎三船敏郎、三好栄子、志村喬

水爆恐怖のあまり、一家をあげてブラジルへ移住しようとする老人の恐怖と絶望。

・今ひとたびの 47東宝◎五所平之助◎龍崎一郎、高峰三枝子、北沢彪

左翼運動家とその恋人は、戦争のため引き裂かれる。戦後再会した二人は……。

・男ありて 55東宝◎丸山誠治◎志村喬、夏川静江、藤木悠

勝負一筋で家庭を顧みない野球監督、審判とのトラブルで出場停止になり……。

・風の又三郎 40日活◎島耕二◎片山明彦、大泉滉、中田弘二

不思議な転校生・高田三郎と、小学生達の交流。宮沢賢治童話、初の映画化。

・きけわだつみの声 50東横映画◎関川秀雄◎伊豆肇、信欣三、原保美、沼田曜一

同題名の戦没学生手記を基にシナリオ化。ビルマ戦線で死んでゆく学徒兵たち……。

・細雪 83東宝◎市川崑◎吉永小百合、佐久間良子、岸恵子、古手川祐子

三女の見合いと四女の恋愛を中心に、戦前の芦屋の優雅な生活を描く谷崎文学。

・秋刀魚の味 62松竹◎小津安二



『七人の侍』(黒澤明)

郎◎笠智衆、岩下志摩

娘を嫁にやる父親の哀しさ。東野英治郎、杉村春子も好演。

・七人の侍 54東宝◎黒澤明◎志村喬、三船敏郎、木村功

野武士に狙われた村が、浪人たちを雇って応戦する。雨中の決戦の迫力。馬体の美。

・社葬 89東映◎舛田利雄◎緒形拳、江守徹、若山富三郎

大手新聞社社

長が腹上死。次期社長の座を巡

って社内抗争が激化。

・仁義なき戦い

73東映◎深作

欣二◎菅原文太、

松方弘樹、梅宮

辰夫

終戦直後の広島。ふとしたこ

とでヤクザとな

った男が、組織

の汚さを知る。

・新吾十番勝負

59東映◎松田

定次◎大川橋蔵、

岡田英次、長谷

川裕見子

將軍、吉宗の

落としダネとして生まれた葵新吾が、次々と難敵と対決する。

・紅孔雀 54東映◎萩原遼◎中村錦之助、東千代之介、高千穂ちづる

ローマの聖者から授けられた紅孔雀の宝庫の鍵。正義の剣士と海賊が争う。

・素晴らしき日曜日 47東宝◎黒澤明◎沼崎勲、中北千枝子、渡辺篤

日曜日を愉しく過ごすとする貧しい恋人たち。終戦直後の東京が舞台。

・切腹 62松竹◎小林正樹◎仲代達矢、三國連太郎

大名家の門前で切腹を申し出る浪人。これをタカリと踏んだ家老との問答。

・瀬戸内少年野球団 84ヘラルド

・エース◎篠田正浩◎夏目雅子、郷ひろみ

敗戦直後の淡路島。野球少年たちの成長を描く。

・大菩薩峠 57東映◎内田吐夢◎

片岡千恵蔵、中村錦之助、長谷川

裕見子

「音なしの構え」で天下無双の剣客・机竜之助。罪無き人を殺した彼の行く末は……。

・忠臣蔵 37大都◎白井戦太郎◎

阿部九州男、松山宗三郎、琴糸路ご存知赤穂義士伝。大石内蔵助

で主演の阿部九州男は大都のスター。

・椿三十郎 62東宝◎黒澤明◎三船敏郎、仲代達矢、入江たか子

お家騒動に巻き込まれた浪人が、持ち前の剣の腕と頭脳で大活躍する。

・天国と地獄 63東宝◎黒澤明◎三船敏郎、仲代達矢、山崎努

会社重役の子供と間違えられて、運転手の息子が誘拐される。警察と知能犯の対決。

・東京物語 53松竹◎小津安二郎◎笠智衆、東山千栄子

尾道から上京した老夫婦が、子供たちの家を転々とし、妻は死ぬ。家族崩壊を描く。

・どですかでん 70四騎の会◎黒澤明◎頭師佳孝、伴淳三郎、三波伸介、渡辺篤

ふきだまりのような街に住む、哀しくも滑稽な人々の日常。原作は、周五郎「季節のない街」。

・二十四の瞳 54松竹◎木下恵介◎高峰秀子、笠智衆、田村高廣

小豆島の分教場に赴任してきた女教師・大石先生。12人の教え子

たちとの師弟愛。

・野菊の如き君なりき 55松竹◎

木下恵介◎有田紀子、田中音二

旧家に生まれた少年の、年上のいとこの淡い恋心。伊藤左千夫原作「野菊の墓」の映画化。

・馬喰一代 51大映◎木村恵吾◎三船敏郎、京マチ子、志村喬、菅井一郎

大正から昭和初期の北海道。「北海のトラ」の異名をとる馬喰の育児法。

・ビルマの竖琴 56日活◎市川崑◎安井昌二、三國連太郎、三橋達也

南方戦線で死んだ兵士たちのために、僧となって供養を続ける兵士。竹山道雄原作。

・雪国 57東宝◎豊田四郎◎池部良、岸恵子、八千草薫

雪国の温泉町で知り合った芸者に魅かれる男。川端文学を文芸映画の名匠が映画化。

・夢 90黒澤プロ◎黒澤明◎寺尾聰、原田美枝子

監督自身の見た8つの夢を描くオムニバス。スピルバーグが製作協力、世界配給した大作。

・用心棒 61東宝◎黒澤明◎三船敏郎、山田五十鈴、東野英治郎

ふたりの親分が対立する宿場町。浪人三十郎が互いをいがみ合わせ、壊滅させる。

関田孝正ベスト60

数年前、先輩諸氏に還暦を記念

してベスト60の原稿をお願いした。私もその歳になり、自分のベスト60をまとめておくことにした。

まず、これはと思う作品を思いつくままに洋邦別々に書き出してみた。さらにもれがないか、これ

までの映画観賞メモのようなものをひっくりかえして確認。落とせない映画がいくつもみつかった。

その結果、洋画100本、邦画60本が候補にあがった。洋画のほうに印象的な作品は多かった。洋邦

見ている比率からも妥当なところだ。

次はこのなかから60本を選ぶ作業。洋邦30本ずつ選んでみた。どの作品を選び、どの作品を外すか迷うところだ。名画として確固たる位置づけにある映画は外すようにし、リアルタイムで見た映画を

中心に選ぶようにした。邦画は30本に絞れたのだが、洋画が30本までしぼりこめない。そこで洋画は

35本、邦画はさらに5本削って25本とした。そして、各ベスト10を選んだ。11位以降は順番がつけないので、あえて順番はつけな

った。

このようにして選んだのが、私のベスト60である。果たしてこれでよいのかとも思うが、これが私のとりあえずのベスト60である。

〈洋画ベスト35〉

①大脱走（ジョン・スタージェス）1963

ドイツの捕虜収容所からの脱走劇。物語の面白さの中に反戦のメ

ッセージをこめた。戦争映画、娯楽映画の傑作。エンドタイトルに登場人物が一人ひとり現れてくる

ところはカーテンコールを思わせ、映画の余韻を楽しめる。

②ベン・ハー（ウィリアム・ワイラー）1959

映画の醍醐味を味わわせてくれる。なんと平和な終わり方だろう。

「目には目を」的な復讐ではないつまでも争いは終わらないのだ。戦争シーンのスケール、アクションも

見ごたえ充分。

③ロンゲスト・ヤード（ロバート・アルドリッチ）1974

壮快。見終わった後も興奮冷めやらぬ映画。刑務所内で囚人チー

ムと看守チームとのフットボールの試合が展開される。

④浮き雲（アキ・カウリスマキ）1996

とぼけた味の映画。すがすがしいラスト。夫は市電の運転手を、妻はレストランのフロア係を首に

なる。それぞれ再就職口をみつけるが……。『過去のない男』『街の

あかり』とともに敗者三部作というらしい。カウリスマキの映画は、

貧しくともつらくとも強く希望をもつて生きたいものだという気にさせてくれる。

⑤初恋のきた道（チャン・イーモウ）2000

感涙。村の娘（チャン・ツイイー）が新任の学校の先生を好きに

なり、一途に思いを寄せる。娘の表情、行動を克明にカメラは追う。それが感動を生む源か。田舎にぼ

つんとある生徒数も20人ぐらいの学校。そこで40年教鞭をとる教師。

人の営みとはそもそもこういうものではないのか。毎日毎日が同じことの繰り返し。それこそが人生。

⑥ダイ・ハード（ジョン・マクテ

イアナン）1988

超高層ビルの30階、パーティー会場が13人のテロリストに占拠される。戦うはニューヨークの警官ひ

とり。ストーリーが緻密に構成されている。主人公の台詞もかっこいい。余裕を失わず、ユーモアもある。

⑦ブレッドランナー (リドリー・スコット) 1982

未来は人間が人間らしく生きることができない世界なのだろうか。怒り、弱いものを救い、悲しいときには涙を流すという人間的な行為を見せたのは、人造人間・レプリカントだった。SF映画の傑作

⑧オール・アバウト・マイ・マザー (ペドロ・アルモドバル) 1999

移植手術、エイズ、同性愛、痴呆、シングルマザー、麻薬中毒など、今日のテーマを取り込みながら、愛、生、死、性という人間の根源的な問題を物語った。

⑨ニューヨーク1997 (ジョン・カーペンター) 1981

大統領専用機が監獄になっているニューヨークに不時着。ならず者の体の中に微小の時限爆弾を仕込んで救出に向かわせる。ニューヨークは凶悪犯の巣窟と化している。制限時間は24時間。

⑩007／危機一発 (ロシアより愛をこめて) (テレンス・ヤング) 1963

オリエンタル急行内でのショー

・コネリーとロバート・ショアの格闘シーンは手に汗を握る。

◇以下、製作年順

ウエスト・サイド物語 (ロバート・ワイズ) 1961

ミュージカルの傑作。踊りも歌も素晴らしい。

冒険者たち (ロベール・アンリコ) 1967

哀愁漂うラスト。夢を実現させたい二人の男と一人の女。アフリカ沖の海底に眠るという財宝探しへ。

大いなる勇者 (シドニー・ポラック) 1972

山男志願の主人公、ジェレマイア・ジョンソン (ロバート・レッドフォード) がそれらしい山男になるまでを復讐劇をはさみながら展開する。ユーモアもある。何か一本がっしりした芯を感じさせる破壊! (ピーター・ハイアムス) 1973

「俺たちは生きていくつだけだな」。でも頑張らなければと思わせてくれる映画。悪と警察上層部がつるんでいることを知りながら現状を打開しようと奮闘するが、ままならない。不貞腐れ、諦め、苛立ち、そんな刑事をエリオット

・グールドが演じる。ペーパー・ムーン (ピーター・ボグダノヴィッチ) 1973

映画は心を和ませる。詐欺師は牧師から、交通事故で母親を亡くした女の子を叔母の元へ届けるように頼まれる。詐欺師とおしやまな女の子の珍道中。

華麗なるヒコキ野郎 (ジョージ・ロイ・ヒル) 1975

第一次大戦後。空にしか生きがい求められなかった男たち。そこには生命を燃焼させる場があった。

カッコーの巣の上で (ミロス・フオアマン) 1975

「お前らは何もしない。失敗しても俺は試すだけ試してみた」。この台詞がいい。精神病院の患者がもっているものは、通常の社会人にもある。

ディア・ハンター (マイケル・チミノ) 1978

ベトナム戦争もの。ロシアン・ブルーレットに象徴される戦場の狂気、男の友情が描かれる。アメリカ本国で製鉄所で働きながら平和に暮らしていた男たちは鹿狩りを最後にベトナムの戦場に赴く……。48時間 (ウォルター・ヒル) 1982

コンビものの傑作。刑事が脱獄囚を捕まえるため、仲間の囚人を48時間仮釈放させて行動をとともにする。異色の組み合わせは、ニック・ノルティとエディ・マーフィー。

ブレイス・イン・ザ・ハート (ロバート・ベントン) 1984

1930年代のアメリカ。人種差別甚だしく不景気風が吹き荒れる貧しい時代。未亡人が二人の子供を育てながら、同居人の黒人や盲目の白人の協力を得て綿畑をつくり、みごと収穫に至るまでを描く。

ナチュラル (バリー・レビンソン) 1984

事故で十数年のブランクを余儀なくされた男が三十五歳でプロ入りして野球選手として活躍する痛快な夢物語。レッドフォードのさわやかなキャラクターと監督の奇をてらわぬ映画技法が溶け合った映画だ。

カイロの紫のバラ (ウディ・レン) 1985

映画の登場人物に恋をして、その人物が画面から出てきて……。ファンタジー。映画好きの人妻をミア・ファローが演じる。スタンド・バイ・ミー (ロブ・ライナー) 1986

子供たちの死体探しの旅。誰もが経験したことのあるような少年時代の気持のやりとりを描いており、忘れていた大切なものを思い起こさせてくれる。ベン・E・キングの主題歌が映画の感動を盛り上げてくれる。

戦場の小さな天使たち (ジョン・ブアマン) 1987

戦時下のイギリス。しかし、明るい映画だ。子供にとって戦争は悲惨なものではない。空襲にあった次の日、母親がピアノで「ビギン・ザ・ビギン」を弾く。つかの間の安堵、余裕。これなら戦争に負けはしない。

俺たちは天使じゃない (ニール・ジョーダン) 1989

涙と笑いとサスペンス。なかなか感動的。死刑囚の脱獄に紛れて脱獄する二人の囚人。牧師になりすましてカナダへの逃亡を図る。圧巻は、シヨーン・ペンが演壇に立って市民の前で話をしなければならなくなる。どうなる……。

7月4日に生まれて (オリバー・ストーン) 1989

ベトナム戦争で戦い手ひどく傷ついた男が、やがて反戦活動家として目覚め自分を取り戻していく。完全無欠の国などどこにもない。

アメリカをどこかで信じている監督の思いは伝わってくる。

レオン (リュック・ベッソン) 1994

殺し屋と少女のつかの間の心の交流。メルヘンアクション。麻薬がらみで家族皆殺しの目にあわされた少女は同じアパートに住む男に助けを求める。その男は殺し屋だった。ラストのスイフトとの銃撃戦が見せる。

ヒマラヤ杉に降る雪 (スコット・ヒックス) 1999

格調高い重厚な映画。人種的偏見の強い戦後のアメリカ北部の漁港。日本人漁師にかけられた殺人の嫌疑。戦争によって引き裂かれる愛。真実を探り出す新聞記者。自然を捉えるカメラもいい。

グリーン・デスティニー (アン・リー) 2000

碧名剣(グリーン・デスティニー)という名剣をめぐって師弟の愛憎劇とラブストーリーが繰り広げられる、中国のチャンバラ映画。ワイヤーアクションが華麗で見せる。

キル・ビル (クエンティン・タランティノー) 2000

やぐざ映画、チャンバラ、香港映画に大いに触発された映画だ。

ハチャメチャな内容だが、映画そのものは整えられており、美学というのだろうか、何かがある。

ファム・ファタール (ブライアン・デ・パルマ) 2002

一瞬に見る自分の悪しき未来。すかさず生き方を変える。夢落ちの一変種だが、楽しませてくれる。

ミリオンダラー・ベイビー (クリント・イーストウッド) 2004

老トレーナーは女子ボクサーを育て世界チャンプを目指す、話は意外な方向へ。悲劇の物語であると同時に師弟愛の物語でもある。神への不信を描いた物語でもある。また、父と娘の和解を予測させる物語でもある。

ブローケン・フラワーズ (ジム・ジャームッシュ) 2006

とぼけた味ながら人生を考えさせる佳作。息子探しの旅に出た男が20年前につきあっていた女たちのもとを訪ねる。どんな出会いがあるのか、人生とは——。奇妙な間をとりながら映画は進む。音楽ものんき。

ダークナイト (クリストファー・ノーラン) 2008

マンガっぽくなくリアルに描こうとしてシリーズ中の傑作となった。バットマンはラスト、善がな

した悪を自ら背負って生きていくことを決意する。しかし、子供は知っている。バットマンは悪くないことを。かっこいい。ヒーローものはこうでなくては。

イースタン・プロミス (デビッド・クロネンバーグ) 2008

イギリスのロシアンマフィアの世界。全編に漲る緊張感。風呂場の死闘が圧倒的迫力。クロネンバーグは、超能力者同士の戦いを描いた「スキヤナーズ」から27年を経てひとつの到達点に達した。

〈邦画ベスト25〉

① **関の彌太ッペ** (山下耕作) 1963

泣かせる、きれいな、無駄のない映画だ。十年の隔たりを埋めるおさよ(十朱幸代)の歌と彌太郎の台詞が効いている。「悲しいこと、辛いことがあっても忘れること。忘れて日が暮れば明日になる」。

② **八月の濡れた砂** (藤田敏八) 1971

青春ゆえの言葉にできない、いらだち、やりきれなさ、苦さ。村野武範が蹴ったサッカーボールが校舎の窓ガラスを粉々にする冒頭シーンが衝撃的。哀愁を帯びたラ



ストの主題歌が忘れられない。

③新幹線大爆破 (佐藤純彌) 1975

話がよくできていて面白い(脚本 小野竜之助と佐藤純彌)。ある速度以下になると爆発するという装置を新幹線に取り付けて身代金奪取を狙う犯人グループと国鉄、捜査陣とのスリリングな攻防戦が展開される。

④紙屋悦子の青春 (黒木和雄) 2006

戯曲の映画化。戦争中の青春。

死と隣り合わせの普段の生活をユーモアをもって描く。同僚を戦争で死なせてしまったものが終生もちつづける悔恨の情。好きな相手と結婚できなかった時代。

⑤十五才 学校Ⅳ (山田洋次) 2

000

登校拒否の少年は、ヒッチハイクの旅に出て、途中で多くの人に出会い成長していく。学校ばかりが勉強の場ではない。冒険の旅に出ることも勉強はできる。ひるがえつ

て、学校を冒険の場としたらどうだろう。新しい発見があり、また新鮮な気持ちで勉強ができるのではないか——そう山田洋次は問いかける。

⑥シコふんじやった。(周防正行) 1992

笑えるし、ジーンとくる。部員が一人しかない廃部寸前の大学相撲部。員数あわせの本木雅弘らは、OBに罵倒され、屈辱をはらすためにやる気になる。

⑦県警対組織暴力 (深作欣二) 1975

菅原文太のデカ、松方弘樹のやぐざの二人の関係を柱に、県警のエリート刑事(梅宮辰夫)、一生下積みの刑事(佐野浅夫)、チンピラ(川谷拓三)など個性的な人

間たちが織り成す人間ドラマ。脚本は笠原和夫。

⑧帰らざる日々 (藤田敏八) 1978

友情を描いてなんともいえない感傷的な気分させてくれる。恋をして友情が芽生えて、そんな青春の日々。まさに「帰らざる日々」だ。藤田敏八の快心作。

⑨反逆のメロデー (澤田幸弘) 1970

原田芳雄が長髪のやくざとして登場する。小さい弱いものが大きなものに歯向かう。警察権力を皮肉って面白。アナキーな面白さに満ち溢れる日活ニューアクションの一作。

⑩緋牡丹博徒／お命戴きます (加藤泰) 1971

ワンカットワンシーン、ローアングル。加藤泰、独特の映像美。冒頭一人の男を助ける。男は名を尋ねる。このあとタイトルが現れる。これに「矢野竜子です」という、お竜の声がかぶさる。たまりません。

◇以下、製作年順

幕末太陽伝 (川島雄三) 1957
主人公(フランキー堺)のバイ

タリテイ溢れる生き様に共感。

用心棒 (黒澤明) 1961

痛快時代劇。浪人者が小さな宿場に巣食う悪どもを退治して去る。筋立ての面白さ(脚本 菊島隆三、黒澤明)。ユーモアもある。豪快な殺陣。三船敏郎の魅力が溢れる。佐藤勝の音楽もいい。

座頭市物語 (三隅研次) 1962

盲目の居合いの達人。勝新太郎の個性にびつたりあったユニークなキャラクター。ハンデを背負いながらやたらに強いのが魅力。強敵との殺陣がシリーズのみどころだが、この一作目の平手造酒(天地茂)との一騎打ちがベスト。

非行少年 (川辺和夫) 1964

ドキュメンタリータッチ。いけすかない教師に授業中歯向かい、逃げる教師を追いかける。反抗は、悲劇を招いたり社会のルールに沿って処理されたり……。愛すべき不良たち。

けんかえれじい (鈴木清順) 1966

痛快。痛快。ユーモア。ロマン。戦前の地方の中学で喧嘩に明け暮れる南部麒六(高橋英樹)の青春。恋しい人とも別れざるを得ず、風雲急を告げる東京へと旅立っていく。

男はつらいよ (山田洋次) 1969

イラスト・エッセイ



『パフューム ある人殺しの物語』

中田好美

新しい映画の楽しみ方、香りの想像

画面から流れる、音と映像。

見た瞬間、頭の中で香りが再現される。

人それぞれの香りの記憶。見る人によって想像する

香りが違うかもしれない。彼が求め続けた、究極の

香りとは……。

あなたの目、耳、そして鼻で感じてください。

女に惚れて片思い、シリーズの原型をつくった第一作。シリーズも回を重ね、満男くんが大きくなるとともに映画を見ているほうも歳をとる。そんな見方ができる映画。

海軍特別年少兵(今井正) 1972

死を描いて生を認識させ、死と隣り合う戦争を否定するというのが、反戦映画の描き方のひとつである。この映画では死に追いやられるのは少年である。その悲惨さは反戦を訴える説得力に満ち満ちている。

藍より青く(森崎東) 1973

戦争中の話。男は軍隊へ。死ぬかもしれない。死をみつめての愛というのは激しく、感動的。松坂慶子がいい。

最も危険な遊戯(村川透) 1978

松田優作の殺し屋。スピーディーな身のこなしが和製アクション映画に新風を吹き込んだ。防衛庁の巨大プロジェクトをめぐる財界の巨物、政界の黒幕らが絡んでストーリーは展開する。

転校生(大林宣彦) 1982

メルヘン。男女の中学生が神社の階段から転げ落ちたときに体が入れ替わってしまう。尾美としの

り、小林聡美が初々しい。

浪人街(黒木和雄) 1990

石橋蓮司演じる母衣権兵衛が大勢の敵を相手に斬り合うシーンが圧巻。母衣の剣は居合斬りなのである。「座頭市」とはまた違った迫力、素晴らしさがある。

少年時代(篠田正浩) 1990

戦争中の学童疎開の物語。少年たちの屈折した心理がよく描かれている。少年同士の権力抗争はやくざの世界と同じだ。しかし、こどもの世界だ、和解はある。ラスト、少年と番長との別れは泣かせ

未来の想い出 Last Christmas mas(森田芳光) 1992

ファンタジー。人生を三回生きる女の子二人の物語。運命は決められたものではなく、切り拓くものなのだと語りかける。

いつか読書する日(緒方明) 2004

人生をみつめる映画。人生とはこういうことなんですと声高にではなく、さりげなく語ろうとしている。お互いに愛情をもちながら、それを心にしたまま生きていく男と女。人はなにかをかかえながら生きていかなければならないということを描いているようにも思える。

おくりびと(滝田洋二郎) 2008

人の死に立ち会う家族、人々をユーモアを交えて暖かくみつめる秀作。仕事を探していた主人公(本木雅弘)は偶然、納棺師という仕事に就くことになった。妻はその仕事を嫌ったが……。



つれづれ映画エッセイ

ビデオ・DVDの時代

小泉 敦

増殖するビデオテープ

退職して大幅に自由時間が増えたことは間違いないが、それがうまく機能しているとは到底思えない毎日を過ごしている。最初はこれで映画館へ行ける時間ができたと歓んだのはいいが、実際観に出かけようと思うと、これが観たいと思う映画がそんなにないのである。『ぴあ』などの情報誌は何十年と買ってきたから、いまさらそんな話わかりきったことではないかと云われればそれまでだが『ぴあ』はいつの間にか隔週発売になった。

これもご時世なんだろう。パソコンや携帯電話、端末機器類の急速な発達でそっちを利用したほうが素早く情報を得られる。いまのひとはわざわざ2週間待つて情報誌など買わないのかもしれない。新聞すら買わなくなったという最近の若者たちの話を聞いてからもう久しい。

自由時間が増えていざ自分が観ようと思ったときに、観たいと思う映画がないというのはつらいものがある。確かに食わず嫌いというのもあるから、先入観だけで判断してはいけない、もつと間口を広くしてたくさん映画を観ることだよと云うのは正論だとは思う。わたしも映画は映画館でいうのを原則としてはいるけれど、こうなるとそうも云ってられない。

そこで近くのレンタル・ビデオ店へ行く破目になる。いまからみれば大昔になる29年ほど前の話。つまり1980年のことである。わたしはこの年初めてビデオ・デッキなるものを購入した。製品はソニーのベータマックスJ1である。この当時まだビデオの普及率はそんなでもなかった。実際その頃友人関係でビデオを持っているひとはそんなにいなかったのが実

情である。この頃ソニーの陣営とVHSの松下(現パナソニック)陣営が激しく販売合戦を繰り広げていた。中味は規格戦争である。J1は当時19万8000円もしたのである。これは他のどのメーカーも価格的には似たような設定であったと思う。

さて話はこの頃から巷にすししずつ現われてきたのがレンタル・ビデオ店である。とにかくよく通った。しかしレンタル料金は当時ベラボウに高かった。それに十生テープ、これがまたんでもない価格だったのである。わたしの記憶しているものでいちばん高い生テープを買ったのは、ベータの画質ランクの落ちる最長で4時間30分記録できるものが一本1500円もした。高性能のテープではなくスタンダードのテープ価格である。

誰もがデッキを持つようになり、急激に普及率が高まると機器の価格も下がって、同時にテープの価格も下がった。それから機器の性能が年々向上した。映画は映画館でということ云つていながらレンタル・ビデオ店に通うとはなにごとと思われるかもしれないが、じつはその頃観るために通ってい

たのではなく映画をダビングしておいて、後で時間ができたときに鑑賞しようと思っていたのである。しかしこれがまずかったということに気がつくのは、ずつとずつと後のことである。テープはまさしく「増殖」するにしたがい整理が追いつかなくなってしまうのである。それだけではない。いちばんの問題は、肝心の録画した映画を観ることもなくそのままお蔵入りとなってしまうことにある。こういう経験をしているひとはわたしだけではないだろうと思う。高い授業料を払い、苦い体験の量に比例してひとは学習量も増えるのである。これにまつわる失敗談は山ほどある。

これに加えて80年代末あたりからBS放送とWOWOWにも入ったものだから、ここからの録画量が半端ではなかった。正確には分からないが最盛期、毎月買っていた録画用生テープの本数は50本前後だから、1年で600本、これを10年15年と続けたものだから、結果恐ろしいことになったのである。初期の頃はテープの価格が高かったものだから、1本のテープにとにかくできるかぎり多くの映画や番組を詰め込んだのである。

一般にパソコンなどない時代である。テープが数百本のときはまだよかつたが、数千本単位になってくると、録画し終わった段階でそれをしていないと大変なことになる。

だがその状態になったときは、もはや手のほどこしようなないほど末期的症状を呈していたのである。とにかく一日中それだけをしているわけではない。仕事の他にすることは山ほどある。そのとき整理していかないと、どのテープになにを録画したのかまったく分からなくなってしまう。その頃『超整理法』とかいう本を読んだりして参考にしようと思ったが、自分の場合役には立たなかった。

当時したことと云えば、索引カードをつくってアイウエオ順にならべたことぐらいで、それも間もなく放棄せざるを得なくなった。もう後は野となれ山となれという気分になって増殖するにまかせていたら、自分でも目を疑うほどの本数に成長した。置き場所などないから仕方なく段ボールに入れて田舎の小屋の倉庫にそのまま保管しておいた。段ボールには運んだ年月日だけ記入し積み上げたままである。段ボールは大型ビニール

で密封してはおいたが不安はあった。もはやテープの中味が何かなんて調べている時間などはない。

しかしそれでも今後入手不可能と思われる大事なテープに関しては、特別な配慮をしておいた（たとえばテープを小分けしたビニールの中に入れ乾燥剤と一緒に保存しておくとか）。ペータのテープだけでも1000本以上はある。

当時のことを思い出すと市販のソフトがとにかく高くて、よほど自分にとって必要だと思ふものをごく限られた範囲でしか買うことができなかった。覚えていいるのはもつとも初期に買ったもので、ペータのボブ・マリーイの60分ライヴ映像のソフトである。これが15000円もした。だがどうしても欲しかったので買った。

ボブ・マリーイは1979年の一度だけ日本に来て10回ほど公演を行った。わたしが行けたのは新宿厚生年金の一日だけだったが、後にボブのファンになった若い連中と話をするとき、この一事だけで彼らから羨望の眼差しでみられたのである。なんととなれば1981年にボブ・マリーイは死んでしまったからである。ボブのファンは彼の生の姿をその後二度と見る

ことができなくなったからである。まだ36歳の若さだった。

映画館かレンタル店か

さてわたしは、その十数年に及ぶレンタル・ビデオ店に通った日々、ある日突然のごとくサヨナラをした。理由はいくつかあるが、借りてきたものを観ていないということがそのいちばんの理由であろう。これは主に映画だけでなく、ダビングするという目的だけにとらわれて映画を観ていないのである。しかも録画したものが杜撰な整理のため行方不明となり、終いには自分でも何をしているのかさっぱり分からなくなってきたのである。

映画はナマモノだ。どんな映画にせよ、その生きていく時代に登場してきた映画は、そのときに観ないとはだめなんだろうと思う。この真理は永久不変で、たとえばどんなにひどい作品であっても、その時代の子供だと考えるべきである。こういう時代に生まれるべくして生まれてきた映画なのだと考えることは、作品鑑賞上必要な観点のひとつではある。

しかしそれでもひどい映画はたくさんある。時間ができていざ映

映画がいっぱい……。キラ星のごときスターたちの魅力縦横に語り……、思い出の映画の舞台を旅して……、スターの横顔を垣間見て……。映画ってスバラしい！！

人生は映画とともに

今市文明著・四六判並製240ページ・定価1995円

フツッのおやじのヘンに熱っぽい映画評論集プラス感動的自作シナリオ集！観る・書く・撮る。

シネマフリークにあり

門馬徳行著・四六判上製本368ページ・定価2940円

九州の片田舎で育った少年の、胸躍らせた見果てぬ夢は……。18歳で上京して30年かけて見て書いた、注目の娯楽映画評論集！

ばってん映画論

久保嘉之著・四六判上製本240ページ・定価2100円

家族、友人、そして町が、少年に生きる素晴らしさ、楽しさを教えてくれた。思ひは、生の原点、戦前へ……。下町に生まれ育った元小学校教師による、懐旧の随筆集！

幼少思慕

——下町、それは少年の故郷だった
河野章著・文庫サイズ上製本112ページ・定価1400円

〒270-0107
千葉県流山市西深井339-2
有限会社「こまめ書房」

TEL 04 (7156) 7121
FAX 04 (7156) 7122

画館に行こうと思ったら、自分が観たいと思うような映画がないというのはつらいと云ったのは、あくまでわたし個人の問題である。

映画館で観たいと思う映画がないのであれば、過去に向かうしかない。観たいと思いつながら、つい見過ごしてしまった映画も多い。

わたしが長い空白の時を経て、再びレンタル・ビデオ店に足を踏み入れるようになったのは退職後のことである。もはや時代はとつくの昔に磁気テープからDVDへと移行し、見比べればすぐ分かるようにその画質には雲泥の差がある。それに品揃えの豊富さは以前とは比較にならないほど充実している。

映画館で観たのは別にして、これを書いている時点で今年観たビデオの本数は、音楽物など含めると147本である。これにはもちろん何度も観ている作品も含まれている。一日一本というのが理想で、せいぜい二本までがいいところである。そうでなくても昨今の映画は長いものが多すぎる。なかには首をかしげるような長さのものもある。

書いているうちに思い出してきたが、借りたのに観ていないとい

う原因のひとつは、当時レンタル料金が高いということだけではなく、一泊二日返却というのが当たり前だったように思う。一日延せばそれだけ延滞料金をとられるから、とにかく一泊二日で返却していた。仕事の関係で夜中は会社勤務であるからビデオなどゆつくり観ている暇などない。したがってとりあえずダビングだけしておくという状況になる。

いまレンタル・ビデオ店に行くと、中には籠を下げて店内を物色している若者もいる。籠を見ると、DVDが山のように入っている。とても二三日で観れる量でないことは明らかである。いまはパソコンでたいていのものはコピー可能であるから、パソコンを何台も持っていれば、すぐ観る必要はないのだろう。もちろん大量生産して売ったりすれば犯罪である。しかしこれらのものをコピーして売るという発想がそもそもわたしなど理解できない。

昔と同じにレンタル・ビデオ店に通いはじめたと書いたけれど、以前と大きく変わったことがある。それは借りたものとはかく全部必ずその場で観るということである。なんだ当り前じゃないかと云

われるかもしれないが、以前はこれが当り前ではなかったのだ。

だがしかし何度も云うようだが、映画館で映画を観ているときの幸せな気分というものは特別である。近年最高の一本と思われるジョエル・コーエンの『ノーカン トリー』だって最初に映画館で観ないと、あの異様な迫力は伝わってこないと思う。こういうときは映画館で観ておいて本当によかったと思うのである。

この稿とは別の話になるのでやめておくが、アナログ・レコードがCDに切り替わったときと、同じくカセット・テープがMDなどにデジタル化されていったときの運命は同じである。いまでもレコード数千枚とカセット・テープはそのまま保有している。しかも現役で問題なく聴ける。これらのものを別のものに移し変えている時間はもうほとんど残されていないしその気もない。時間の浪費である。そんな事をしてる暇があつたら一冊でも多くの本を読んでいたい方がよい。

ところでわが家にあるJ1だが、先日ベータを観るために配線したらちゃんと映った。わたしはこれまで何台のデッキを壊したのだから

う。なにしろ二年くらいしか持たない物も多々あった。最初は修理に出していたが、そのうち修理費より買った方が安上がりになるという時代が到来した。デッキは時代とともに小型軽量化が進んだので、狭い部屋でも4台ぐらいは置けた。たぶんこれまでに15台やそこらは壊したと思う。分配器をつけて多くの番組を同時録画していた時代があったのである。

先日テープを整理していたら、1994年の日本シリーズ第6戦をまるごと録画していたものが出てきた。長嶋ジャイアンツが森ライオンズに4勝2敗でついに一矢報いたときの試合である。シリーズの最優秀選手は槇原寛己で、こういうのが出てくると整理そつちのけでなんとなく見てしまうから不思議だ。

利便性のツケは自分に

もうひとつビデオに関連して忘れてならないことがある。登場時期がいつのことか、いま正確に云えないが、80年代のあるときからレーザーディスクなるものが出現したのである。ほぼレコードのLPサイズと同じで、容量は不明だがだいたい長編映画一本分でソ

フトが売り出されたのである。これを観るためには当然ハードを買わなければならない。そしてベータ対VHS同様規格の違う製品対決がここでもまた起こったのである。

これがまた結構な金額で、ソフトの値段もバカ高かった。しかしこの映像をこの頃電気店などで見せられると一瞬食指がうごいたこともまた事実である。レーザーディスクは後のDVDが出てくる元

映画館雑感

清水和昭

『チェンジリング』の絞首刑の場面は、なかなか生々しかった。

そこで思い出したのはチャウ・シンチーの『カンフーハッスル』。人足、実は十二路譚腿の達人、シン・ユーが古琴波動拳の刺客フォン・ハックオン、ジア・カンシーの二人組に暗殺される場面。琴を鳴らしてその音が大きくなって、屋根の上のシルエットの猫の首が切り離される。波動が剣のようになつてその相手を切り裂くのだ。そのとき殺気を感じたシン・ユーが振り向く。チャウ・シンチーはほんとうに映画が好きなんだな

にはなつただろうが、製品寿命はみじかかった。そしてこの製品の犠牲者もまたいたのである。街を歩いていたある日のこと中古レコード店の外に置かれたスチール棚に、埃を被つて無造作に立て掛けられていたレーザーディスクが、いままきに絶滅せんとしている姿を見た。一枚100円の値段がつけられていたが、コレクター以外に買うものなどまづないであろう。こういう姿を見るにつけ、わた

とつくづく思つてしまつた。笑つてしまつたのはそのあとで、翌朝シン・ユーの死体にかぶせてある頭陀袋の上から首を縫つてつないであることで、これはやつぱり監督のセンスなのだろう。DVDでは映画ではあれほどはつきりと見られたシーンがつぶれてしまつていた。うちのモニターの解像度が低いせいかもしれない。やつぱり映画館でしかみられないものはあるのだ。

それと、ずいぶんと前にNHKのBSで見た『トゥームストーン』。ワイアット・アープをカー・ト・ラッセル、ドク・ホリディをヴァル・キルマーが演じていた。とくにヴァル・キルマーの演技は圧巻。暴力シーンが多くてちよつと、という感じなのだがリンゴ・キッド(マイケル・ビーン)と

しはある感慨を抱かざるを得ない。どの時代に生まれ、またどの時代に死ぬかなんて誰にも分からない。比喩として云えばビデオ・テープやレーザーディスクの時代に遭遇した者が不幸で、DVDや携帯電話を当り前のように使える時代に生まれた世代だから幸せとは云えないのと同様に、利便性ばかりを追つた結果のツケはめぐりめぐつて自分に跳ね返ってくるような気がする。車社会になつてからだつ

ドク・ホリディの決闘シーンはすごかった。『ヴェラクルス』のシーンとは対照的で、至近距離で拳銃の撃鉄を起こして、相手の頭を狙つて撃つところまでを映像で見せる。ただよってくる緊張感凡庸ではない。TVでこれなんだから、映画館でみたらもつとすごかつたにちがいない。

『ハリー・ポッターと謎のプリンス』を見に行く。私の右隣の席は高校生くらいの男の子の三人連れ、左隣はひとつ席があいて老夫婦。右隣の丸刈りの男の子の集中力はすごかった。腕組をして食い入るようにスクリーンに見入っているのだ。ほとんど動かない。感心してしまつた。このシリーズがヒットしているのもうなずける。いろいろな年代の人々が支えてい

て大した時間が経つたわけではない。GMの破綻にしたつて、これが進歩の行き着く先の姿かと思えば思えなくもない。これは経営の破綻であつて、人類が築いてきた科学の進歩、その成果とはまったく別のことだというひともいよう。しかし本当だろうか。いくら物にかこまれてもひとは幸せにはならない。と同じく持つていないから不幸だとは云えまい。

るのだ。

『チェンジリング』のラストでアンジェリーナ・ジョリーが質問に答えて短いセリフをかえすのだが、そのとたんに私の両隣に座つていた女性が(もちろん見ず知らずの人でたまたま隣に座つた人です)二人してハンカチをだして目をおさえたのにはびっくりした。ちゃんと観てる。あたりまえか。

いい映画には人が足を運んできている。DVDからはなれてまた映画館に戻りつつあるのかもしれない。

◇

◇

◇

緒形拳の死が教えてくれたこと

老いさらばえることへの一考察

久保嘉之

過日、疲れてもいたのであまりへビーな作品は御免蒙りたくて、それも笑えるものがないなと思いついて、『燃えよ！ピンポン』（ロバート・ベン・ガラント監督）を観た。この映画は殆どが見掛け倒しで、がっかりさせられることが多いのは充分承知しているのだが、大好きなクリストファー・ウォーケンが出ていて、ことでもあり、なんと観られるだろうという軽い気持ちで、観たのである。結論からいうと、やはりウォーケンの怪演だけが目立った作品で、可もなく不可もなしといった程度のものであった。それとヒロインを演じた、

このところ『MI3』や『ダイハード4・0』などの大作への出演が相次いでいるマギーQが、まあよかったぐらいであろうか。この人歌手の伊東ゆかりの若い頃によく似ている、と思う。

だが言いたいことはそれではなくて、実は主人公の父親役のロバート・パトリックについてなのである。『ダイハード2』で空港を乗っ取るテロリストたちの一人として登場し、『ターミネーター2』で液体金属のターミネーターを演じてアーノルド・シュワルツネツガーの向こうを張り、その存在を際立たせた彼である。背中を丸め両肩を前に突き出した独特の歩き方で、すぐに彼と気付いたのだが、顔が違っている。どうにも自信が持たなくて、エンドクレジットで名前を確認して、やっと納得がいった。随分老けたなあ、湧いた感慨がそれであった。

あれから十七年か。人は年をとる。摂理である。だが頻繁に観て（会って）いるとなかなかその変化に気が付かないもので、それがたまに観る（会う）と著しく変わったなという印象を受ける。ウォーケンも相応に年をとってはいるのだが、彼の場合はたまに見かけ

るし、またすでに『ドミノ』や『マイ・ボディガード』で免疫？が出来ていたのださほどには感じなかったらしい。パトリックは随分久しぶりの見参だったので、その分驚きが増したものとみえる。

人様の老いに吃驚するぐらいだから、かくいう私もそれなりの年である。還暦まであと二三年を余すのみ。今鏡に映る顔と、十五年前の写真の顔を比べてみると、髪は薄くなったし皺は増えたしで、少なからず嗟嘆を禁じえない。

『燃えよ！ピンポン』から日を経ずして、『バンテージボイント』（ピート・トラヴィス監督）を観た。ここでも同じような驚きに遭遇する。冒頭で、TV局の敏腕ディレクターといった初老の女性が登場するのだが、目元がどこかで見た感じの人だなと思っていながら、暫くして漸く気が付いた。シガニー・ウィーバーだ。張りのある眼元と引き結んだ時に唇の横にできる皺が特徴の、『エイリアン』シリーズであれほど私を魅了してくれた彼女の顔をすぐに思い出せないなんて。いかに人の顔を憶えるのが苦手な私といえど、それはないだろう。もしかしたら私の記憶力は、かなり減退してし

まっているのかもしれない。

『メジャーリーグ』『山猫は眠らない』シリーズや、『誰かに見られてる』のトム・ベレンジャーもそう。何かの作品でちよつとだけ出演していたが、かなり老けていた。その驚きに気を取られ、何かの作品が何だったのか、どうしても思い出せない。やはり私の記憶力は衰えている。

人間、寄る年波には勝てない。それは判っている。体は無理が利かなくなるし、気力は萎えがちになる。所詮人の一生なぞ驕過隙（かきまき）それもよく判っているつもりである。だからこそ馴染める人の老いを目の当たりにすると、自分自身が逆照射されて、寂しくいたたまれない気持ちにさせられる。

だが世の中には老いてなお盛ん、若い頃に比べ年をとってからの方が魅力的になる人も、確かにいる。ピーター・フォークなど、その好例かもしれない。そう『刑事コロンボ』その人である。リー・タマホリ監督の『ネクスト』（ニコラス・ケイジ主演）の前半部で顔を出していたが、飄々とした可笑し味はそのままに、ストレートに年を取っていた。元気でいてくれたんだと、思わず微笑ましくな



ありし日の緒形拳

る。

そういう人達を見るとうまく年を重ねたなど羨望の限りなのだが、一体どこでその違いが出るのだろう。先述のシガニー・ウィーバーもうまく年を重ねた一人だ、と思う。若い頃も素敵だったが、今回何台ものカメラにテキパキと指示を出す姿は、とても渾身の力感としていた。

——緒形拳もまさにそういう人であった。

二

今は昔に比べ寿命が延びた。だから六〇歳とはいっても、それほど老け込んではいないのかもしれない。だが確実に老いは忍び寄ってきている。私自身は年をとってからのほうが魅力的な人間では、決して有り得ない。このままでは

先々老醜を晒すのは眼に見えている。どうやったら回避できるのだろうか。

そんなことをとおいつ考えながら日を過ごしていたら、突然緒形拳の訃報が飛び込んできた。まさしく突然といった感じだった。

いや違う。亡くなる少し前に、緒形は『ライラの冒険 黄金の羅針盤』（クリス・ワイツ監督）でライラを助ける白熊イオレク・バーニソンの吹き替えをやった。長い芸能生活で初めての吹き替えであったが、同時に最後となってしまった。その折の声音が気になった。

伸びがなくなすれた感じだったのである。また彼が最後に出演したコマーシャルを観て、外見は変わらないながらも、その声に艶というか張りが無くなっているのに驚いてはいたのである。だから予兆はあったのだが、まだそんな歳ではないだろう、まだまだ活躍してもらわなければ困るという強い思いが、突然といった感じをもたらしたものと思われる。

平成二十年十月五日午後十一時五十三分、肝臓による肝臓破裂による。享年七十一歳。天照院普遍日拳居士が戒名。

遺族によると、緒形拳は平成十

一年ごろ慢性肝炎を患い、十五年に肝臓癌を発症。だが手術を受けず、投薬治療と食事療法で亡くなる間際まで活動を続けていたという。また昨年暮れに、腰椎圧迫骨折の大怪我を負っていたともいう。ざっと数えてみたが、癌を患ってからでも、映画出演十一本、テレビドラマは十五本、のみならず新国劇出身の彼は、師のひとりである島田正吾が、開祖である澤田正二郎から継承して演じていたひとり芝居『白野 シラノ』を受け継ぎ、島田の三回忌追善興行として演じたりもしている。

なんという演技に対する執念であろか。手術を受けないという選択もそうだが、苦しい闘病生活だったに違いない。だが手術を受け病床に臥すよりも、死ぬまで役者であり続けたいという思いを優先させ、貫き通した。その強い思いが五年の歳月、緒形を生かし続けた。

緒形拳は役柄を選ばず、そしてなりきった。「彼が演じると、台詞に生命が宿る」といわれたほどである。『鬼畜』（野村芳太郎監督）・『檀山節考』（今村昌平監督）そして『火宅の人』（深作欣二監督）と三度日本アカデミー最優秀主演

男優賞を受賞し、平成十二年には紫綬褒章を受章している。その他ポール・シュレイダー監督の『MISHIMA』でカンヌ映画祭芸術貢献賞（この映画は勝新太郎をして『道草しちゃだめだよ』といわせしめ、また家族の大反対により日本未公開となっている）、池端俊策監督の『あつもの』ではペノデ映画祭グランプリ等々、受賞の数は枚挙に暇がない。性格は堅物で真面目、そこから推察すると濡れ場などは苦手のように思えるが、これが案に相違して大の得意。真面目なればこそ、見栄も恥ずかしさもかなぐり捨てて、一心不乱になれたのであろう。

主役のみならず、脇に回っても緒形の演技力は群を抜いていた。善人悪人なんでもござれ。しかも自分のみならず、主役を見事に引き立てるのである。だからいろいろな監督が、彼を使いたがった。映画・テレビドラマ・舞台その夥しい出演数が、そのことを如実に物語っている。山田洋次監督が、藤沢周平原作の三部作のうち『隠し剣 鬼の爪』『武士の一分』の二作品で緒形を起用したのも、芸達者でしつかりと脇を固めたい、作品に「格」を持たせたいという気

持もさりながら、永瀬正敏・木村拓哉といずれも若い主人公を補佐してほしい、引き立てて欲しいという思いがあったからであるのは、まず確かだろう。

——昭和・平成を駆け抜けた名優が、またひとりなくなりました。

三

緒形拳が演じた役は、そのどれもが魅力的だが、私としては彼の存在をくつきりと印象付けた、初期の作品に好きなものが多い。中でも一番好きなのは、何と書いても仕掛人・藤枝梅安である。ブラウン管に登場した当初、その迫力に思わず背筋がゾクゾクとしたのを、今でも覚えていて。悪女と化した生き別れとなっていた実の妹を、仕掛けるだけの凄みが確かにあった。小林桂樹・萬屋錦之助・渡辺謙等が後に演じているが、いずれも緒形の迫力には遠く及ばない。この『必殺仕掛人』の大ヒットが、『必殺仕事人』シリーズにつながり、藤田まことの当たり役となった中村主水を生み出したのは、ご存知の通りである。次に好きなのが、これも初期の作品で

あるが、歌人で気の弱げな長兄を演じた『豆腐屋の四季』である。内容に惚れ込んで、原作本まで買った。もつとも作るのには空つ下手なくせに、短歌や俳句が好きなせいも、あるにはあるのだが。

円熟期においてはいうまでもない。というより、その凄さに圧倒されつばなしだといったほうが、正しいかもしれない。

晩年の彼の作品は、相変わらず上手いなあと思うことはあっても、円熟期ほどには、気を入れて観なくなつた。魅力を感じなくなつてしまつたのでも、飽きてしまつたのでもない。緒形と私の年の差はひと回りとちよつと。ということ

は、彼が晩年を迎えたと同様、私も年を取つたということである。緒形の髪は真っ白になつたが、私のは薄くなつた。彼を見ると、私ことは、自分が老けたことを、思い知らされることもある。次第に疎遠気味になつたのは、多分そういう理由からではないかと思う。

老いていくのは、怖い。なぜか最近そのことを実感する。折も折、河原直美監督の『殯おくりの森』を、やつと観た。

老いていくことの、悲しみと恐れ。記憶が薄れていくことへの、

苛立ちと絶望。残された人は、それでも生あるいは生きてある証をこちら側に繋ぎ止めておこうと、もがく。深く強い、それでいて静かな思いが、感覚的な映像で見事に表現されていた。これほどの感動を味わつたのは、小栗康平監督の『泥の川』以来である。

因みに、私のつれあいが、主人公真千子と同じく老人介護施設で働いている。彼女の言によると、そういった施設に預けられた人は、急速に老け込み、認知症が進行するそうである。原因は定かではないが、意識するしないに係わらず、家族に見放されたという思いが、症状を悪化させるのではなからうか。生きる張り合いとなる、仕事・趣味がない所為もあるかもしれない。それゆえ施設で暮らし、遠い記憶にのみ縋り、それすら薄れていこうとしているシゲキ老人の、「私は生きてるんですか？」という問いかけは、何物にもまして重く、つらい。

だが最後の最後まで演技に執念を燃やし続け、家族と共に生き、家族と親友津川雅彦に看取られて逝つた緒形は、おそらく本望だったであろう。襲い来る死への恐怖と必死に闘つたではあるが、過

ぎ越しかたを振り返って、悔いはなかったに違いない。

緒形拳が亡くなつた歳まで生きたとして、あと十三年。死んだ親父の年に至つては、二三年しかない。果たして残された晩年をどう生きればいいのか、いやどう生きなければいけないのか、明確に見えてくるものが、今の私にはない。この歳になつて、胸を張って誇れる何物をも持たないばかりか、執念を燃やすべき対象すら見つけ出し得ない私の焦りや菌痒さは、もう幾らも先がない、ただただそこに根差していると思う。

しかしながら、辿るべき道筋は臆気ではあるが、見えているようである。いやそう思いたいだけなのかもしれない。だがそこに執着しないでは、少なくとも晩年だけでも、緒形のようにひたむきに生きることは、叶わない。それならば……歩き出せ。老いさらばえるまで、歩き通せ。一所懸命、自分を鼓舞してはみるものの、不精な私には、それすら切ない願いでしかないのかも。

——緒形拳氏のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

(平成二十年十一月)

「止めて下さるな、妙心殿！」

廉価DVD『平手造酒』とわが青春

鈴木輝夫

「止めて下さるな、妙心殿。落ちぶれ果てても平手は武士じや男の散りぎわだけは知って居り申す、行かねばならぬそこをどいて下され、行かねばならぬのだ」

台詞だけでも大衆演劇の股旅物の様なクサさ(?!) いっぱいであるのだが、その上、ド派手な着物を纏った三波春夫が、これでもかと許りに、浪曲で鍛えた独特の艶のある声で思入れたつぷりに絞り出すのである。特に最後の「行かねばならぬのだ——」は、大量の唾も飛びかねない渾身(?!) の大絶叫で、その天下の美声も思わず裏返ってしまう様な有

様なのである。

今の若い人は知らないであろうが、これは——国民的歌手——と言われた彼の三波春夫の唄った『大利根無情』の、二番と三番の間奏の時に入る台詞である。因みに、少し長いが全編を書き出すと次の様になる。

利根の利根の川風 よしきりの
声が冷たく 身をせめる
これが浮世か
見てはいけない 西空見れば
江戸へ江戸へひと刷毛
あかね雲

「佐原雛子が聴こえてくらア想い出すなア……、御玉ヶ池の千葉道場か、うふ……。平手造酒も、今じゃやくざの用心棒、人生裏街道の枯落葉か」

義理の義理の夜風に
さらされて
月よお前も泣きたかろ
ころみだれて

抜いたすすきを 奥歯で噛んだ
男男泪の 落し差し

「止めて下さるな、妙心殿。落ちぶれ果てても平手は武士じや男の散りぎわだけは知って居り申す、行かねばならぬそこをどいて下され、行かねばならぬのだ」

險険ぬらして 大利根の
水に流した 夢いくつ
息をこらして
地獄まいるの 冷酒のめば
鐘が鐘が鳴る鳴る妙円寺

丸で、ありありとその情景が眼に浮かぶ様な見事極まる歌詞と、それを更に増す効果をもたらす間奏の台詞であると思う。私はこの国民的歌手の、東京五輪を唄った『東京五輪音頭』や大阪万博を唄った『世界の国からこんにちへ』など、ある意味能天気味の泰平楽な歌は大嫌いなのだが、彼の初期の歌、例えば『チヤンチキおけさ』、例えば『雪の渡り鳥』、例えば『一本刀士俵入り』、そしてこの『大利根無情』などはたまたまなく好きである。

歌われているその内容や主人公が本来好きと言う事もあるのだが、その歌詞も心に沁み入る様な名文句がある為でもあるのだ。——合羽からげて三度笠 何処をねぐらの渡り鳥——『雪の渡り鳥』より、——野暮な浮世の裏表 教えこまれて——昔 夢でござんす なにもかも——『一本刀士俵入り』より、そして先に書いた『大利根無情』の、——義理の義理の夜風に さらされて 月よお前も泣きたかろ——などなど、思わず、「上手いっ」と唸ってしまう程の小憎らしい名文句の一節である。私は常々思っているのであるが、こ

の様な思わず唸ってしまう様な決定的な名文句を作り出すのは絶対に不可能で、少なくとも、戦前にその教育の基本的部分を受けた人々だけに可能である、と。そんな事に考えを巡らせ、そこから思い切り大胆に類推する事を許して貰えば、戦前更にはその残滓が色濃く残っていた昭和三十年代前半までは、ここに唄われていた主人公達、鯉名の銀平『雪の渡り鳥』、駒形茂兵衛『一本刀士俵入り』、平手造酒『大利根無情』などは、国民大衆一般の総てが見知っている、言わば、——御存知、我々がヒーロー——であったのである。大衆小説で、更にはそれらを元にした映画で、国民大衆はそれらの多くの場面で、ある時は泣き、ある時は笑い、ある時は怒り、そして最後には、拍手喝采を惜しみなく送ったのであった。

数年前、我が田舎町と隣町の境に、この辺りでは可成りと言える量販店が出来た。大きいと言っても地方の田舎町であるので高が知れているのだが、隣接してスーパーマーケットも設置されているので、食糧品や大方の日用品などは一応総て間に合う。私もよくそこに行くのだが、二十日程前、余り広くない通路に無造作に置かれた白いワゴンが眼に入った。それには、何処かのDVD・CD店で売れずに廃棄処分になったと思わ

れる、DVD・CD類が山と積まれているのだ。何れも名作・傑作・話題作と言える様な代物はなかったのだが、兎に角安かったので、DVD 2枚と落語のCD 2枚を選んで求めた。

その一枚が先に書いた歌の主人公平手造酒の映画である(この映画と三波の歌とは直接関係はないのだが……)。題して、その名も『平手造酒』。昭和二十七年年度製作・新東宝映画である。監督・並木鏡太郎、原作・中山義秀、脚本・橋本忍(!!)、主演・山村聰、共演・花井蘭子、月形竜之介、柳永二郎、左卜全、田中春夫。新東宝と言った処も曰く言い難いであるのだが、出演者にしてもどちらかと言えば地味で、飛つ切り大スターなどは一人も出ていない。強いて注目点を挙げれば、ホンを書いた橋本忍であろうか。兎も角、今現在となつては、——完全に忘れ去られた映画——の数多くの一本である。

実は、戦後生まれの例に漏れず、私もこの大衆のヒーローに就いては何も知らないのだ。小説でも読んだ事はないし、浪曲でも講談でも聞かなかったし、彼を扱った映画の類すら一本も見えてはいないのだ。唯、三波春夫の例の歌や、田端義夫が戦前に唄って大ヒットした『大利根月夜』(この歌も昔から大好きで、中学生時代!!から愛唱歌の一つ……)で、平手造酒なる人物を辛うじて知っているだけの話である。

平手造酒なる——不遇のヒーロー——に就いて知っている事を挙げれば、作家中山義秀、『天保水滸伝』、神田・お玉が池の千葉周作道場、ヤクザの笹川繁蔵と飯岡助五郎、利根川べりの大出入り、史実は今一つはつきりとはしないのだが、その大出入りで死んだのは、実の処、平手造酒と言われた繁蔵側の用心棒であった、尾羽打ち枯らした瘡せ浪人者ただ一人だけ、などなど。予てから他に、彼に就いてもっと知りたい密かな理由もあったのだが、それは後述する事にする。

『シネマ気球』をお読みの若い読者諸兄も、恐らく、平手造酒に就いてあまり御存知ないであろうから、この新東宝映画の『平手造酒』の粗筋を手短かに書く。時は幕末、北辰一刀流の祖、神田・お玉が池に道場を構える千葉周作(月形竜之介)は、江戸でも一、二を争う剣の達人で門弟も数多に及んだが、その弟子達の中でも随一の使い手は、師匠の代稽古を勤めるまでの腕を持つ平手造酒(山村聰)であった。

浪人である平手は腕は随一であるのだが、生来の世渡り下手で、門地(家柄の事)も金もなく更にはこれと言った伝もなく、師匠の周作も何かと心配してはくれるのだが、未だに仕官の道は儘ならないでいた。傍輩の神坂(田中春夫)の様に、腕は全く立たないのだが、家柄が良い許りにましまと五百石取りの旗本の養子

になる者もあり、平手の心は次第に焦りにも似た苛立ちに噴まれて行く。折も折、門弟達の多くが密かに憧れていた師匠周作の娘が、千二百石取りの自身の旗本の元に興入れ(婚礼の事)してしまい、他の門弟達と同様に密かに憧れていた平手も落胆の色は隠せなかったのである。そんなある日、千葉一門の酒宴がさる料亭で開かれた。その席で平手は一人の芸者を見初める。名を増次と言った。驚いた事に、増次は嫁に行つた周作の娘と瓜二つの相貌をしていた。益々、増次に引かれて行く平手。

三味線などの芸事が好きで、自ら進んで芸者になつた増次ではあつたが、芸者世界の理不尽極まりない仕来りに心底嫌気がさし、つくづくこの世が疎ましくなつていた。鬱屈の晴れ処のない平手は、本来の酒好きが益々高じ、さる居酒屋で強かに酔い、遂に、武士にあるまじき乱暴狼藉を働いてしまう——。それが原因となり、周作が弟子かわいさで、必死の思いで奔走してくれた、但馬・出石藩仙石家への士官の道も閉ざされてしまう。

それからの平手は人が変つた様に荒び狂い、腕に任せての乱暴極まる荒稽古で同輩達を半死半生にさせ、更には、以前にも増しての酒浸りの日々へと堕ちて行く。そして、若き剣豪平手造酒を、更なる悪夢が襲う。労咳である。今で言う結核。戦前までは、死に至る不治の病であつた。

当時の治療法は唯一つ。滋養のある物を取り、安静にしている事だけである。全きの絶望に襲われた平手は江戸を捨てた。芸者の世界につくづく嫌気がさした増次とともに……。

——薄幸の男と女の征く運命——

は、通俗小説や大衆芝居では常として決まっているのである。ここからは、先に書いた三波の『大利根無情』の台詞で事足りる。

「平手造酒も、今じゃやくざの用心棒、人生裏街道の枯落葉か」

更なる後半の粗筋の説明を補強(?)する為には、田端義夫の大ヒット曲『大利根月夜』の一節を挙げれば駄目押し(?)であろう。

あれを御覧と指さす方に

利根の流れの 流れ月

昔笑をてながめた月も

今じゃ今じゃ 泪の顔で見る

江戸を捨てた平手と増次が流れた先は、下総国(今の千葉県北部)の佐原。その名も坂東太郎と称された関東一の大河である利根川。佐原はその利根川べりにあり、香取神社の総本社である香取神宮が鎮座している事で名高い。辺り一帯を縄張にしている博徒・笹川繁蔵(柳永二郎)は、同じく博徒である飯岡助五郎とあらゆる事で争い事を起していたのだが、香取神宮の祭礼の仕切りの件

でも常に刃傷沙汰が起り、何時、出入りになっても可笑しくない退つ引きならぬ事態となっていた。

ひよんな成行きから、飯岡一家に襲われた繁蔵の自分を助けた平手は、労咳の発作から突然の吐血に見舞われ、その儘、笹川一家の厄介になる身になってしまったのである。繁蔵の世話で妙円寺に身を寄せた平手と増次はそこを飯の宿とし、病の身を養生しながら笹川一家の子分達に剣術を教え始めるのであったが、売った江戸とは言え矢張り恋しい彼の地であつた。

嘗ては、——千葉道場随一——と唄われた平手造酒であつたが、今や、病身を託つヤクザの用心棒と成り果ててしまったのである。

江戸を売つた鄙なる地佐原に流れたのが良かったのか、更には、心から心配して何くれとなく面倒を見てくれた妙円寺の住職妙心和尚（左卜全）の為か、平手の体は何とか小康状態を得るまでになつて行つた。捨てたとは言え矢張り江戸はたまらなく恋しいし、侍にあるまじき所業をしたにも拘らず師匠の千葉周作からも、——早く体を治して再び剣に生きよ——との、心優しい文も送られて来るのである。煩悶する平手。

ヤクザ風情の用心棒にまで堕ちてしまった己が、たまらなく切なくて何とも情けなく、侍である事に嫌気がさして来るのであるが、かと言って武士である事も捨て切れなかった。

そんなある日、小康を得ていた労咳がぶり返し、再び大量の吐血に見舞われて床に伏す身になつてしまった折しも、——己の御主人——である飼主笹川一家は、宿敵飯岡一家と一家の存亡を賭けた、大出入りに発展しそうな雲行きになつていた。

斯くて、世に言う処の、——大利根河原の決闘——が行われたのである。——生き急ぎ死に急ぐ肺病やみの不遇な天才剣士平手造酒——は、大利根の河原すすきを血潮に染め、その短くも鮮烈な生涯を終るのである。

私はこの様な、——不遇なヒーロ——が好きである。いや、それは私許りではない。ある時期まで、日本人の大多数が好きであつた。小説に、歌舞伎・芝居に、浪曲に、講談に、歌謡曲に、そして映画に。おそらくそこには、日本人の琴線に触れる何かが、常として流れていたのであらう。日本人の心情の最深部に脈々として常に流れていた、日本人たる証の涸れる事なき密かなる地下水脈——。戦前から戦後の一時期まで、殊に映画になつた不遇なヒーローは数多くに上り、各社の看板スターは競い合う様に演じるのを常とした。

看板スターは不遇なるヒーローを演じる事に因り、大衆の涙を弥が上にも絞り、更にその人気を不動なら

しめ様と目論む。涙を流そうと待ち構える大衆、涙を流させ様と目論むスター・映画会社、二者のある種の合意の共犯関係が、ある時には作為として、又、ある時には不作為として、暗に成立していたのである。その様な諸々を明々として取り込み、敢然として成り立っていたのが、言う処の大衆演劇であつた。通称、——旅回り——。これも私は好きであつた。

私がそれを初めて見たのは、小学校に上がる前であつたが、大井川沿いにある所謂ヘルスセンターで、母親を含む近所の婦人グループに連れられて見た。幼い私には、勿論その出し物が何であつたか定かに判らう筈もなかったが、回りの大人達の多くが涙ぐんでいたのは、今でもはっきりと覚えていたのだ。子供心には、その役者連中の鮮やか極まる毒々しいまでの化粧が、何時までも強烈に残つた……。今現在では、見に来る客層や置かれた諸々の状況が違う為か、昔通りではないにしても、基本的な有り様は、大きな事では変りないと思う。私はそこに、——芸能一般——のラジカル性を見るのだが……。

話を映画『平手造酒』に戻す。この圧倒的大多数の映画ファンから全く忘れ去られている映画『平手造酒』は、何処から考えても取るに足らない駄作であらうし、深夜のテレビの

枠内で時間つなぎに流す映画（それもローカル局の……）ぐらいの価値しかない代物であり、投売りのワゴンセールの山の中に置いて、二、三ヶ月経つてもその儘残つてしまう作品である。唯一の見の可き処は、——あの名脚本家橋本忍のホン——である。そしてそれは、彼でもたまには凡作も……ではあるのだが……。第一、主演の山村聰は、歌舞伎で言う処の——平手造酒のニン——ではないのだ。

門閥や門地もなく、又、金も伝もなく、唯々、剣の腕を上げる事に精進した若き浪人が、やがて酒に溺れ女に溺れ、更には労咳と言う不治病に侵され、最後は、ヤクザの用心棒にまで堕ちて生き急ぎ死に急ぐ——。その様な浪人平手造酒を演じる山村聰には、剣に総てを賭けて密かな野望を遂げ様とする、ギラギラとした欲望を演じ切るには清潔すぎるし、後半、酒と女に溺れて次第に自堕落になり、最後は労咳と言う死病を背負い、ヤクザの用心棒風情に堕ちて死に行くと言つた、妖しくも凄惨・凄絶な——死に急ぐ美学——が演技出来ない。山村は東京帝国大学出のインテリであり、出演作品もそんなインテリ風の役処が多いし、本人もそれを得意としている感がある。

小津安二郎の『東京物語』の、長男の町医者様。更には、日米合作映画の『トラ・トラ・トラ』の、連合艦隊司令官山本五十六の様

残念ながら(?!)、彼は酒にも女にも溺れないし、ヤクザ一家の用心棒にもならない……。私にはさだかには判らないのだが、映画会社にも彼の側にも様々・諸々の事情があったのであるが、平手造酒は明らかにミスキヤストである。

監督の並木鏡太郎の演出も、これと言って見る可き処はないのだが、彼の名譽の為に敢えて書けば、このケー・アイ・コーポレーションなる社の発売した新東宝映画『平手造酒』は、所謂——縮尺版——であつて、わずかに六十四分しかないのだ。果たして公開時は、どのくらいのか——尺数——があつたのであろうか？ 私はこのB級(ひよつとしたらC級か……)プログラムピクチャーを、殊更、悪し様に書き過ぎた様である……。勿論、どう最良目に見ても傑作・名作とは言えない。が、悪し様に書いた大きな理由らしき物は、どうやら、私の内部に宿っている極々個人的な理由が、その原因の一つになつている様な気がするのだ。

繰り返すが、私は平手造酒が大好きであるのだ。三波春夫や田端義夫の歌を通じて。である故、それらの歌を通じての、——私の平手造酒像——が確として出来上つてしまっているのである。だから、そのイメージに外れる物は総てダメ、となるのだ。残念ながらと言ふ可きか、当然ながらと言ふ可きか、この映画はそのイメージから遠く遠く外れている

のだ。まあ、この映画が製作された昭和二十七年から時代は少し後になるが、新東宝映画専属で平手造酒が演じられる役者と言えれば彼しかない。そうである。

大傑作『東海道四谷怪談』(中川信夫監督)で、妖気迫る凄まじい妖嬈さで民谷伊右衛門を演じ切った彼の人、天地茂——。彼が平手造酒をやれば、相手役の芸者増次は、当然、彼の三原葉子(!!)しかない。

天地茂・三原葉子のコンビは、——新東宝最強のエロ・グロ路線コンビ——(?!)でもあるのだ。(若い人は知らないだろうが……。私もリアルタイムでは流石に知らないのだ)

そんなたわいない話は兎も角、私はこの映画にいちいちケチを付けて散々に悪態をつきながら、別の処では、十分に楽しみ、喜び、懐かしみもしたし、更には危うく、既の処で涙すら流しかねない始末であつた。

——私の青春——に。この映画の千葉周作役は、前述した様に月形竜之介である。当時、江戸随一と謳われた歴史的剣豪である。流石、月形竜之介。戦前からの剣豪スターであつた彼の千葉周作は、実際の周作も斯くやと思わせる様な見事な太刀捌きを見せ、暫し私を唸らせたのである。更には、笹川繁蔵の敵、飯岡一家の用心棒を演じた若き日の清水元。(若き読者諸兄は知っているだろうか？ 恐らく、映画好きなら一度は何かしらの映画で、脇役として見ている筈

名脇役)

飯岡一家にもっと強い浪人の用心棒が現われ、敢えなくオハライ箱となり、泥酔して愚痴る処など正に絶品である。更には今一人。三波の歌の中で歌われている妙円寺の住職の妙心。誰あるう、あの怪優左ト全(!!)が演じているのだ。(黒澤明の『七人の侍』の農民与平役で、三船敏郎と絶妙のカラミを見せたと言せばお判りであろう……)

私が田端の『大利根月夜』や、三波の『大利根無情』からイメージして作り上げた妙心とは、必ずしも合致しないのであるが、あの飄々とした恍けた風情は正にト全その物であつて彼ならではの味わいがあり、それはそれで十分に楽しめたのであつた。唯、映画は三波の歌どおりの展開ではなく、監督の並木の演出は、その役目を芸者の増次にさせているのであつた。少し、いや、大いに残念であつた。実を申すと、私がこのDVDを求めた理由の大半は、あの歌の様な行動をとる——妙心殿——。そこに——私の青春——があつた。正確に記せば、私の苦く切なく甘い青春がだ……。

私は学生時代とその後の可成り長い時間、——巻屋——であつた。この小誌の編集長であられる関田氏も、毎回健筆を揮つておられる小泉氏も、

何を隠そう、見るも鮮やかな手練の技(?!)を見せる、なくてはならないベテランの巻屋であつたのだ。嗚呼、学生時代、私の糧を満たしてくれた、切なくも懐かしき巻屋稼業——。

今は全く判らないのであるが、当時、新聞社は印刷部門(編集にもいたが、我々とは頭!? が違った……)のきつい仕事などには、数多くの学生アルバイトを抜き使っていた。多数の高速輪転機で瞬く間に印刷された新聞紙は、百部が一塊となつて次から次へとベルトコンベヤーから流れ、陸続として大きな發送場へと押し寄せて来るのである。我々学生が主力のバイト連中は、各々がベルトコンベヤーの左右に据えられた鉄製のテーブルに陣取り、流れ来るその百部の塊を、ここを先途と許り片っ端から梱包するのである。次第次第に疲れて行き、都心部に發送する頃には部数もビークに達し、時間も午前三時前後になつて来ると、思いは唯々、仕事後の風呂とその後の缶ビールだけに飛んで行く。

我らその作業をする者も、社員達も学生バイト連中も、陰で——巻屋——と呼んでいた。我らは軽い自嘲と微かな憐憫を込めて……。梱包紙か梱包ビニールで、一晩中、百部の新聞紙を巻くからである。新聞の休刊日以外は、午後九時までは現場に入らなければならない。関田氏も小泉氏も極めて真面目であつたが、

私と言え、これが実に好い加減で、しばしばズル休みをした。勿論、千九百五十円(!!)也の日給は出ない。それでも嫌になつてしまつと、如何にしても嫌なのだ。とは言つても、銭がなくなると、全く身動きがとれない。否でも応でも働くしかないのである。愈々となつて切羽詰ると、やおら決心を固める。

先ず、新宿ゴールデン街の行き付けの飲み屋に開店早々行き、軽くビールを呷る。勿論、ぐでんぐでんになる迄酔つてはいけない。働けなくなる。第一、そんなになつたら、常に眼を光らせている現場の職制や玄関の警備員室に詰めている彼らに、たちまちに摘み出され、悪くすると臍首になつてしまふ。軽く叩つて何とか威勢(!!)を付け、——いざ鎌倉へ——となるのである。働く場所品川にあつたので、——いざ品川へ——であらうか……。マスターや回りの顔見知りの飲み仲間、私の——苦渋の選択——を知つてか知らずか、「まだ早いじゃんつ、輝ちゃんもつと飲もうぜつ」などと、悪魔の囁きにも似た甘言を弄するのである。そこで私は、自分自身の未練を断ち切る為と、すでに酔い始めている飲み仲間ウケを狙つて、一世一代の大芝居(!!)——三波春夫版平手造酒——となり、思い切りクサク次の台詞を吐く——。

「止めて下さるな、〇〇殿つ——」。

落ちぶれ果てても鈴木は巻屋じやバイトの働き処だけは知つて居り申す、行かねばならぬそこをどいて下されつ、行かねばならぬのだつ——」

これを演じるときの要諦(!!)は、身振り手振りを出来るだけ大胆にし、三波にも優るクサさ、言わば、座長芝居以上の大クサで音吐朗々と吐くのである。確かに最初のころは大ウケであつた。が、回数を重ねる内に段々と……である。こんな馬鹿馬鹿しいことをして己を笑わなければ、嫌な時は如何してもバイトには行けなかつた。中学生時代から大好きだつた田端義夫の名曲『大利根月夜』で飽く迄クサク喰う三波春夫のヒット曲『大利根無情』。それらに因つて形作られた、——私の平手造酒像——。あの当時の私は、今の自分の惨めたらしい境遇を、不遇のヒーロー平手造酒と、何となく同一視していたのかも……。

今に於ては誰からも忘れられた、新東宝の完全B級映画『平手造酒』。私は、出来の極めて悪いこの映画を大いに文句を言いながら見つ、何故か、いや正確には必然として、そこに遠い昔の、切なくも甘き若い日々を見ていたのかも知れない。

日本映画黎明期から昭和三十年代前半まで、映画ファン許りでなく国

民の大多数は、彼平手造酒の様な不遇・不幸のヒーローを、熱狂的かつ圧倒的に支持し続けた。思い付く儘にその名を挙げれば、ずつと述べて来た平手造酒、新納鶴千代、伊那の勘太郎、関の弥太つべ、りやんこの弥太郎、伊豆の佐太郎、駒形茂兵衛、板割りの浅太郎、沓掛時次郎、そして、恐らく、もつとも多く芝居や映画化、更には流行歌として取り上げられた『暎の母』の番場の忠太郎——。

それらのヒーロー達は、ある時期まで明らかに、——日本人の心情の一片——を雄弁にも現わしている。今、彼らが忘れられ様としている。日本或いは日本人は、全く変わってしまったのか——。私は今でも、彼らが限りなく好きである。

——東映時代劇傑作DVDコレクションと銘打たれた、昔懐かしい東映の時代劇シリーズが刊行された。その第12号で、遂に、——我が加藤泰——の大傑作、あの『沓掛時次郎 遊侠一匹』が出版された——。以前、NHKで放送されたのでビデオで録画したのだが、今度はDVDと言う事なので直ぐに購入した。私が一番好きな監督加藤泰。しかも、この『沓掛時次郎 遊侠一匹』は、加藤泰作品の中でも一、二を争う程に大好きである。

一宿一飯の危うさに生きる沓掛時

次郎を演じた中村錦之助の、想像すら出来ない程の——明晰なる透明な繊細さ——と、監督した加藤泰のカメラの、フィックスなる故の——不自由の自由さ——が、考えられない様な別世界を奇跡的に作り出し、全編総て一部の隙もない程の——完璧さ——を形成しているのだ。ラストシーン直前で流れる、フランク永井歌う処の主題歌が、総てを物語っている。

縞の合羽に 振分け荷物
何が粋かよ 気が付く頃は
皆手遅れ 吹き曝し
俺は 沓掛時次郎

映画評論家、故・斎藤龍鳳師が、取分け、好んで口遊んだと言われている一節、——何が粋かよ 気が付く頃は 皆手遅れ 吹き曝し——には、——漢の哀しび——の総てがある様な気がする。



吉田 修

稲田の土耕しから連綿と続けられる稲作りは、春まだ浅い四月から田植え、草取り、収穫、乾燥を経て精米に至るまで半年を超える長丁場の作業である。

自然界のもたらす総ての恩恵を享受する一方、最大の敵もまた自然界がもたらす害悪と戦って勝たなければ、良質の稲作は望めない。

福松さんはいま、その害悪のひとつ「長雨」と戦っている。稲苗の根付く六月末頃で、成長過程のなかでも、重要な時季だった。

間断なく降り続く雨は一向に止む気配を見せない。八反歩の持田を一巡した福松さんは、小鷹川に面した畔を数ヶ所金鋤で切り壊して水抜きを決行した。

そして、暫く畔に佇み、雨の降量と田圃の水量を目で按配して計測すると、頃合いをみて、畔を鋤で元通りに戻して見回り作業を終えた。

この戦いは、昼過ぎまで続き、昼餉を用意してタマさんの待つ家に帰ろうと、農道に停めてある自転車に向かった。鋤を荷台にゴム紐で固定し、ペダルを踏み出したとき、両輪のタイヤは完全に水に埋没した状態だった。

さらに、水の下路面は深い轍で土が削り採られ、ハンドルとタイヤの自由を奪った。

福松さんは、通い慣れた道への慢心と心配して待つタマさんへの気配りから急いだ。

しかし、片手、片足が麻痺状態で不具合な福松さんには、あまりに状況が過酷だった。

困難を悟って、自転車を降りようと思った刹那、運命はその判断作用を否定し冷徹だった。

ハンドルの機能とタイヤの運動は、もはや制御不能である。小鷹川に向かって深く伸びる轍に前輪が嵌ったまま、福松さんの体は、頭から激しく投げ出された。折からの長雨で増水した川底は、堆積した土砂を洗い粘土質の泥土と化した。大人の膝上ほどの水嵩を福松さんの体重と、農道から小鷹川までの落差で加勢を増した。水面から斜めに進入した福松さんの顔面は、泥土に完全に埋まった。

それは目叩く間の事故だった。羅刹の形相で、もがき苦しむ福松さんの生への葛藤は無残にも溺没により絶息した。

その壮絶な惨状を最初に発見したのは、農道を通学路にする近所の小学生だった。屋下ガリの帰路、現場を通り父親に急を知らせた。

福松さんと目視するのは容易だった。土地の造り酒屋「やま関」の屋号入りの藍染半纏を身につけ、うつ伏せになった福松さんを川面にはっきり確認出来た。冬場の農閑期に福松さんは「やま関」の専属杜氏に乞われて仕込みを助ける。配給のその半纏を福松さんは野良着として常用した。いわば彼のユニホームだった。

小学生の父親は、現場の状況から、川土手に福松さんを引上げて生死を確認する以外は、現状の確保に努めた。そしてタマさんと駐在に急報したのである。それは、はつきり福松さんの死を告げるものだった。タマさんには信じられない、受入れ難い情報だった。にもかかわらず、行動は取る物も取りあえず、葎や手拭を手にとる年老いた姑に急を知らせ向後を託すと、走って現場に向かった。

駐在の警官はまだ到着していなかった。しかし、タマさんは周囲の制止も聞かず川土手に横たわった最愛の夫にすがりついた。変わり果てた姿の夫に対峙しても、タマさんはなお、夫の死を認めたくなかった。顔面に付いた泥を川の水に浸して拭いかけながら、受入れ難い現実を拒否したかった。

福松さんの乱れた衣服を整え、半乾き状態になった泥土を揉み落とし、膝に手を掛けて「ここですよ、痛い处は、痛いって言って」と言いながら、懸命に擦るのであった。

風呂で交わす夫婦の営みを知らなくとも、この事故に立ち会った人たちの涙を誘った。手回しサイレンを鳴らしながら、駐在のジープに乗って、二人の警官が現場に到着した。

この時分には雨もあがり、雲間から薄日が漏れていた。小鷹川は事故直後の汚濁も消えいつもの清流に戻っていたし、河骨の

シネマの風 (8)

黄色い咲きかけの可憐な蕾も、川の流れに身を任せて気持ち良さそうに泳いでいた。

二人の警官は、巻尺で計測したり、第一発見者やタマさんに事情聴取したあと、福松さんの身柄引取りを許可した。

検視を終え、引上げる警官を見送りながらタマさんは初めて現実を受入れ静かに泣いた。

「父ちゃん、家に帰ろうね」

「苦勞様でした」

差し回しのリヤカーに薙を敷いて安置して、顔にはタマさんの襟から外された手拭が掛けられた。一同合掌して自宅までの短い葬送を見送った。同じ頃、学校の授業が五時間目に入っていた。当時、町内会により弔事などの緊急連絡が職員室に通報されるシステムがあった。

仙北小学校と仙北中学校は、小鷹から北へ二キロ程の、国道から少し東に入った場所、通学路を挟んで建っている。

用務員からメモで届いた福松さんの急報は担任から清三さんに告げられた。

「すぐ帰りなさい、お父さんが事故で…」次の言葉を持ったが、「小学校には連絡するから…」と、清三さんの弟への気遣いを示すのみで担任から二の句がなかった。

重大な事態が発生したことを予感した。一方で、あらゆる難難を切り抜けてきた不死身のタフな父を想った。急ぎ足で家を目指し、高まる息でいろいろな思いが頭を過ぎった。

緊急通報で早退するのは、小中学校在籍中で初めてのことである。経験の無い行動が、いまこうして、ひとり家に向かっている不安や孤独感を一層募らせた。

普段、のんびり行き来する中学まで二キロの道程は、瞬くうちに目指す家が視野の内だった。真直ぐ南下する国道は、その昔参勤交代で植栽された沿道の松以外遮蔽物はない。

土塀越しの見慣れた我が家の外観は、いつもと変らなかつた。しかし、玄関を開けたとたん、夥しい数の履物や、親戚縁者のあわただしい立ち振る舞いや、お香の臭いなどで、担任の告げた「事故」が最悪の結果を引き起こしたということを、清三さんは察知した。

「みんな奥の間に居るから早く行きなさい」「しっかり、お別れするのですよ」

「かわいそうになあ…」

口々に悼みや悔やみの言葉を掛けられて、清三さんは奥の仏間に向かった。

傷痍軍人として戦後帰還した福松さんは、「自分の人生には何も無い。戦争で片手、片足が不具になっただけの人生だ」と言っただけの家のなかになにもせず、ごろごろして塞ぎこんでいたそうである。

母親が造る「どぶろく」を、まだ日の高いうちから飲んでいた。しかし、傷が癒えるとともに、日常の立ち居も概ね出来るようになってから、変り始めたという。

「大事なものは何か、最後に残すべきものは何か」「自分は何のために生きているのか」どうせ一遍諦めた命を拾ったのだから、これからの幸運と思わなきゃ、死んだ戦友に申し訳が立たないと言って精神的にも自立した。

人間には前向きに生きようという力がある。さらに、生きる覚悟が決まった人間は強くなるのだろうか。

当時を回顧して福松さんはある日清三さんに言ったそうである。「人生を終えるときに、最後に納得出来れば安らかに死ねる」と。

自らが直面して「死」をのり越えただけに、裏返しとして食欲な「生」への希求が主題だった。死は終わりではなく、完成である。だから、心残さず生き切るといふ話は、今でも清三さんの胸に深く刻まれている。

物言わない父親の死装束作業を、大人たちが施す傍らで、清三さんは息を詰めて座っていた。気丈に葬儀の段取りや電報の手配をする母親に、いま父親のことを「どうして…」と聞き質すのは憚られた。

「完成」された父親をどんな形容で飾っても母親の気持ちを乱すだろうと想ったのである。

(以下次号)

少年の行方不明事件の全貌を描く

戦前（1928年）のロサンゼルスで起こった実話に基づいた物語だ。行方不明になった少年をめぐる事件の意外な展開が描かれる。事件に関わる人々を余すところなく登場させて、その顛末をかなり細かく描いて、全貌を明るみに出そうと努めている。そこまで見せるかと思わせるほど微に入り細に入り描いており、かなり面白い作品に仕上がっている。2時間を超える（2時間22分）作品だが、もちろん長さを感じさせない。監督はクリント・イーストウッド。

シングルマザーであるクリスティン・コリンズ（アンジェリーナ・ジョリー）の一人息子がある日、神隠しにあったように行方不明になってしまう。しばらくして警察から発見したとの知らせを受けて引き取りに行くが、それは息子の名前を名乗る赤の他人だった。警察に別人だと訴えても、精神的に疲れているから見誤っているのだと取り合ってはくれない。息子の

名前を騙る少年もいけずうずうしく息子を装って家に居つく。さらに警察にかけあうと今度は、精神に異常をきたしているとして精神病院に隔離されてしまう。事件を解決すべき警察があてにならないどころか、無茶苦茶で犯罪的ですらある。精神病院では、同じように警察を怒らせて隔離されてしまった女性と知り合う。警察の下請けのような病院。院長も警察の言いなりだ。警察の腐敗を非難している神父（ジョン・マルコヴィッチ）らの助力もあつて病院から救出される。

それで、行方不明になった息子はどうなったのか。実は子供ばかりさらつて殺人まで犯す異常者に連れ去られたことがわかる。犯人は逮捕される。警察の責任を追及する裁判と誘拐犯の裁判が同時に進行する。死刑囚となった犯人と面会して息子の安否を確認しようとするが、犯人はなぜか口を濁してはつきりしたことを言わない。

息子は殺されてしまったのか。捕らえられた少年たちと脱走を試みたことがわかる。成否のほどは

定かではない。生きているかもしれない。生きていても捕らえられなかった恐怖から社会に出ていくことができなくなっていることも考えられるのだ。クリスティン・コリンズは希望を失うことなく子供を探し続ける。職場での淡い恋もさらつと描かれる。会話の中でアカデミー賞候補作「或る夜の出来事」が話題にのぼる。事件から6年後1934年のことだった。

この作品は、行方不明になった子供を探すというシンプルな構図の話なのだが、多くの登場人物にスポットを当て、そのいずれの人物をもおろそかに描くことをせず、すべてにわたって目配りがされており、見ごたえがある。脚本は、J・マイケル・ストラジンスキー「新トワイライト・ゾーン」、SF「バビロン5」などのテレビシリーズの脚本を書いているようだ。精神病院の院長や警部など権威を振りかざすばかりで無能な輩に対する怒りを女たち（クリスティンや精神病院に隔離された女性）が、「くそくらえ」と反抗する姿はイーストウッド映画の真骨頂だ。権威を笠に無能ぶりをさらす警部役のジェフリー・ドノヴァン、少年誘拐事件を追う実直な刑事役

のマイケル・ケリー、気弱そうに見えるのだが何をするかわからない犯人役のジェイソン・バトラー・ハーナーら脇役陣が映画に厚みを加えている。

タイトルの「チェンジリング」（CHANGELING）は、「取り換えられた子供」の意味で、背景に「さらった子供の代わりに妖精が置いていく醜い子供」という伝説があるようだ。

偽の息子は何者だったのかは、DVDで確認してみてください。

（関田孝正）

【編集後記】今回は本誌過去最多の40ページ。ページ数が多ければよいというものでもないのだが、吉田氏と私はベスト60も書いた。選ぶのが意外にむずかしかった。生れて初めて見た映画は何だったのか。「笛吹童子」（54東映）だったか。日活のボクシングがらみの犯罪映画も脳裏をよぎる。犯罪者が警察に追われ、高いところにのぼり墜落してしまう。事件が解決し男女が夜の街を歩いていくシーンで終わるのだ。何という映画だろう。笠智衆の「目白三平」（55東映）も思い浮かぶのだが、60の東宝作品もある。どちらだったのだろうか。上映中の映画館に入ったものの古い革靴がキュッキュと鳴って響きを買っシーンがあった——さて、次号はいよいよ30号だ。（せ）

チェンジリング